

吾人の内に存する佛性之れなり、既に吾人及び一切萬有の中に存すると同時に、又宇宙的統一性を有し、時間と空間とを超越せる大實在なり、左れば久遠と云ふも既に語弊あり、本來本有常住の如來と云は、稍々幾からんか。

斯の如き釋迦佛は果して存在するか、將又如何なる功德を現はしつゝあるか、曰く然り吾人の佛性は父母未生以前よりする無始の存在にして、又幾千萬年の後に到るも滅失することなき無終の存在なり、只吾人は此の本來の面目を覺知せず、發現せしめざるなり、然るに釋迦は此を覺悟し又活現せしめたり、既に覺悟する時は本有本具のそれにして、始めと終とに超越す、故に久遠と云ふも更に不可なし、又其功德は日々夜々寸時の間斷なく、吾人々類及一切衆生に廻向して、吾人が釋迦の一語を口にするも、佛の一字を書するも、悉く之れ其庇蔭に非らざるはなく、向上發進の資料は不斷に提供せられ、誘掖指導の道は、至る所に開かれ、皆俱成佛の期も刹那々に接近しつゝあるに非ずや。

第二章 萬有即佛觀

第一節 乾屎橛、麻三斤

僧あり洞山守初禪師に參して、如何是佛と問ふ、禪師其聲に應じて曰く、麻三斤。

僧あり雲門禪師に參して、如何是佛と問ふ、雲門其言に應じて曰く、乾屎橛。

人あり德山和尚に向ひ、如何是佛の問を發せしに、德山之に答へて曰く、佛是西天老比丘といふ、而して又曰く釋迦、老子是乾屎橛。

人あり法華和尚に對し、如何是佛の問を發せしに、和尚其言に應じて、獨坐五峰前といへり。

其他之れに類する説話は枚擧に遑あらず、此等の話頭を考察するに、或は寓言なるが如きあり、或は單に諧謔を弄せしかの如き類あり、然れども這般大事の問答に當つて、妄に滑諧を恣にすべきの謂れなく、又寓言としては解釋に苦しむ點あり、固より答者其のもの、精神界に立ち入り、其悟徹の狀勢を審らかにするに非らざれば、答意の眞消息を解する能はざる所なり、然れども吾人は其話頭より揣摩して、尤も正直に之が見解を附して、其端的を窺察せんか、想ふに之れ萬有即佛觀の大悟界裡より、自然に發露せるものならずんばあらず、麻と云ひ、乾屎橛と云ふ、一は草木、一は土石と同じ、左

れば此の考案には、三種の意義を有するものと考へ得べきなり。

一は萬有悉く佛性を具し、宇宙の理を全ふして發生せるもの、即ち小宇宙なり、實在の當體、法身如來その儘の當相なり、山川草木悉皆成佛の意義を暗示せるもの。

二は佛の眼より見れば、萬有一切佛なり、佛凡、彼此我他の區別なしと云ふ意義。

三は萬有悉く實在の眞面目を現はし、麻が麻としての効能作動を全ふし、乾屎橛が肥料と爲つて、功德を現はす如き、悉く之れ佛作佛業にして、法身の活現に非すと云ふことなしと云ふ意義。

要するに佛は至る處に轉輾し居れり、見方悪しき時は、草木土石に過ぎざるも、自己が佛眼を開いて見るときは、總て之れ佛ならざるはなし、左れば佛は遠きに求むべからずと云ふに歸結すべきか。

第二節 鯉魚、驢鳴

鯉魚、驢鳴も亦佛とは如何に答へたる有名の禪話なり、之れ固より前の萬有即佛の意義より出たるものにして、植物や土石を一轉して動物と爲せしに過ぎざるものなり、又人あり、慧省禪師に向ひ、如何是佛の間を發するや、慧省禪師之れに答へて、猫兒露

柱に上るといへり、時に問者不會と云ひければ、禪師は露柱に向つて問へといへり。

此等の話題に依つて考察するに、乾屎橛、麻、鯉魚是佛なりとするは、頗る亂暴の如きも、彼の假定せる在天の神、縱令又假定にあらずとするも、有無不明にして、實際し見證し得ざるものを神とし如來として、之れを妄信するに比しては、遙かに實用的なる上に、又他方には色相を以て如來を見んとするものに與へたる痛快の鐵槌と云ふべきなり。

更に又一考すれば、實用的なる土石動植の佛は、木佛、金佛、畫佛等の如き、實際生活上活用し得ざる厄介物、即ち偶像に勝れりとするを、得、即ち既に木像等を佛視して之を敬拜する以上は、麻や鯉魚はそれ以上のものたらざるべからずといふを得べきなり。

左れど吾人は偶像を絶対に排斥するものには非ず、蓋し萬有即佛の理より云へば、繪木亦効驗あるや疑なし、殊に偶像は事實の神や佛には非らざるべきも、其代替物なり、例へば兌換紙幣の如きものなり、紙幣は固より正貨實貨には非ずして、百圓札と雖も、鼻拭にも尻拭にも狭き一小紙片なり、左れど兌換紙幣と云ふ名稱を得たる上は、此

の一小紙片能く人を跳らしめ舞はしめ、笑はしめ喜ばしめ、又歎かしむるの功德ありて、實貨よりは便宜なる點も亦甚だ多きなり。左れば實物に非ずとも効果なしとは云ふべからず。又應擧の畫ける鶏は、實物に非ざるも、吾人の眼を喜ばしむるは實物以上にして、其價も亦實物の幾百千倍なり。斯くの如き意味を以て偶像を全然排斥するは、甚だしき近眼淺薄の考量なりと云ひ得べし。併し又一方には、偶像は必ず應驗ありと確斷するも不可なり。紙幣は破れ燃くるの患あり、應擧の雞も食ふ能はず、以て察すべきなり。

第三節 春花秋月澗水滔天

人あり道詮禪師に對し、如何是佛の問を發するや、禪師答へて曰く、待得雪消後、自然春到來すと。

僧あり投子禪師に問ふ、如何か是れ堅固法身、禪師曰く、山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。

僧あり慈明禪師に問ふ、如何か是れ佛、禪師曰く、水は高原より出づ、又問ふ如何か是れ佛法の大意、禪師曰く、洞庭湖水浪滔天。

僧あり省念禪師に參し、如何か是れ佛と、禪師曰く、新婦騎馬阿家牽。

道元禪師曰く、十方法界の土地草木牆壁瓦礫みな佛事を作すと。

之れ實に東坡の谿聲是れ長廣舌、山色是れ妙色身の眞際、法は法位に住して世間相常住なり、此の世間相を除外して、佛の求むべからざることを道破せし大佛身觀に非すや。

天然の風光を觀じて佛體を逮得し、自然の情致を感じて佛業を覺る、之れ佛陀觀の頗る洒落なるものにして、詩的佛陀は自然界至る所に存して、吾人を歡待し、又人類界にも他の生物界にも無限に存在して、萬事萬物悉く詩的佛陀の面影を宿さるはな、我れ無心にして觀すれば萬有亦無心にして之れに應じ、我れ有心にして之を觀する時は、春花秋月悉く反省の資料となると同時に實在の恩寵を感格すべく、父の慈、夫の愛、何ぞ佛陀の大悲と擇ばんや、萬有即佛觀は詩的なると同時に、達人の達觀なり、小人若し之れに倣は、臭き風流に墮し、又惡平等の佛觀に終らんのみ、志ある者それ之を省みよ。

第三章 有佛無佛

第一節 殺佛殺祖

我は本來の佛なりとの大見識を以て、釋迦何ぞ、達磨何ぞとて、殺佛殺祖を豪語するは禪家の常套なり、此れ果して何等の意趣を有するものぞ、曰く、此れに三の意味あり、即ち左の如し。

- 一、我は宇宙の理を全ふして發生せるもの、又悉有佛性の理に依つて、當來必ず成佛すべきもの、左れば釋迦獨り佛なるに非ず、又達磨獨り祖師なるに非ず、彼等をして佛及祖師を獨占せしむるは、不甲斐なきものなりとなす、志は師に譲らざるべし、底の大勇猛心より出でたるもの。
- 二、我れ苟くも成佛せんか、結局一味平等の佛にして、宇宙的大活靈と致一し、彼もななく、此もなく、本來の面目に於て佛凡豈二ならんや、従つて又大悟界裡に釋迦あり祖師あるの理なく、あるものは單だ唯一の大活靈のみ、何ぞ先佛後佛を區別するの要あらんや、左れば均しく成佛の曉には、我れ即ち釋迦なりと云ふを妨げざる

と俱に、釋迦佛なるものはなくして、我れのみ佛なりと云ふも不可なし、斯かる意味に於て大に自尊心を策勵するは、其真意義を得たるものと云ふべし。

三、先佛祖師は固より之を尊重し敬信せざるべからず、然れども尊信の餘り、之れに依頼して卑屈心を起し本具の佛性を萎縮せしむるが如きことありては、由々敷大事なり、殊に又彼は佛なり祖師なり、我は凡夫なり、資弟なり等云ふ了簡の在る間は、決して眞に非思慮の境域に入る能はざると同時に、又本來無一物の風光は、一切を放下せざるべからず、我が心身を脱落し、大死の境遇に何ぞ釋迦あり達磨あるべけんや。

如上の三義を能く玩味する時は、殺佛殺祖も亦頗る深重の意義を有し、徒らに壯言大語するものに非ざることを知り得べし、但し此の意を領せずして眞に壯言大語するものは、之れ天魔にして固より論外なりとす。

第二節 有無双奪

三十二相八十種好を以て佛を求むるは、此れ魔の所攝にして、必外無別法の宗旨には佛陀なるものあることなしと、此れを無佛論と爲す、又或は心外無別法と雖も、心は

畫師の如く如何なるものも畫き得るものなれば、一切諸法を造作し得、故に佛も亦造らずと云ふことなし、殊に況んや歴史的の應身佛たる釋迦如來は謂ふまでもなく、如何なる佛陀にても吾人の所念に應じて顯現するものなれば、無佛論は自家撞着なりと、之を有佛論と爲す。

無佛論は心外無別法と云ふも、内心には萬象歷然たるを認むるもの、左れば心外に佛陀なしとするも、心内には佛陀の存在を明知するものならざるべからず、蓋し心の内外を云々するは宇宙論の水掛論なれば、佛陀の有無は此れに依つて決すべきものに非ず、兎に角自心の佛を認むるや否やを自決すれば、夫にて萬事を了解せるものなり、左れば心外無別法の宗旨故、無佛なりとするは、明らかに斷見にして、固より取るに足らざる所説なりとす。

又有佛論者は心は一切を作る故に、又佛をも造り得と云ひ、佛は常住なりと信ずるも、作り得るものを造らざることあり、又常住なるべしとは理論上然るべしと云ふに非ざれば、しかく信ずるなりと謂ふに過ぎずして、實有なりとは明證し難し、理窟上然るべきものも、事實上然らざることあり、有るべしと信ずる想定も、其實は假想にして、

事實の有無を實驗せしには非ず、故に具體的に捻出し來れと云はんか、頗る窘迫すべきなり、更に又一步を譲りて有佛論者の所説所信を正當なりとするも、そはしか信ずるものに限れる事にして、信せざるものに之を承認せしむること能はず、左れば佛陀の有無は相手の如何に依れる問題にして、換言すれば信仰の所産と云ふの他なきなり、以此觀之は有佛論は畢竟常見外道たるを免かれざるものなりとす。

第三節 有無双照

無佛論は斷見なり、有佛論は常見なり、俱に二偏に墮して中正の見到に非ず、然らば如何に之を解決すべきか、曰く無佛論も真理なり、又事實なり、有佛論も真理なり、又事實なり、兩者の見解惡しきに非ず、只その所見を固守するを不可となすのみ、曰く然らば一箇の中に二箇の真理と事實あり得べきや、曰く之れ有り、一水四見の如く、事物は總て相手の如何に由つて、其意趣を異にす、兩者の得る所真理の全體には非ず、又事實の全分には非ず、然れど真理の一面、事實の一端を揣摩し得たるものには相違なきなり、真理は一なり、事實は一なり等と固守するは、一箇の事物を一箇のものが觀察する場合の標照にして、二者以上が同一事物を觀察する時は、其事物は種々様々に考察せら

れ、幾多の道理を附會せらるゝものなり、斯の如き場合に當つて、獨り甲の考察、甲の所得を可とし、其他を不可とするは、之れ亦斷常の二見に外ならず、由來眞理と事實とは一と云ふも當らず、二と云ふも當らず、事物そのもの、究竟に體達し、其全般を知了し終りたる時は、一にもあらず、二にもあらず、甲も誤りにあらず、乙も誤りにあらず、只々ありの儘なり、左れば有佛無佛共に其價を損せず、無に即して有なり、有に即して無なり、故に無佛論も可なり、左れど我は有佛を信す、又有佛論も不可なるに非ず、左れど無佛と決定す、斯くの如くにして、双々照らし來つて誤なきなり。

第四章 三佛身觀

第一節 法應二身觀

應身佛とは前に述べたる如く、生身の釋迦牟尼佛にして、應身佛の存在せしこと、猶又其肉身は既に入滅せしも、其德化と遺法とは現に無限の大活動を爲しつゝあるは、何人も否定すること能はざる所なりとす。

法身佛には二種の觀察法あり、即ち起信論の意に擬して云へば、本覺法身佛、始覺法

身佛之れなり、本覺法身とは所謂眞如とか、又は宇宙の大精神とか、哲學的實在と云ふ意味のものに當り、吾人衆生の内具的なる佛性とか良心と云ふものゝ本源にして、善的意味に於ける個人并に宇宙的の本體と稱すべきものなり、左れば本來絶對的に無限性なり、萬有の根源たると同時に、一切に遍滿せる善的意義に於ける活力なり、有神論にては此を別所に檢出して、全智全能の神と云ひ、哲學的には此を抽象して實在と云ひ、無限と云ひ、絶對と云ひ、結局同一物に對する觀察の巧拙に過ぎざるものなり。

次に始覺法身佛とは、應身佛即ち釋迦牟尼の大悟の境界を指したるものにして、大悟徹底本來の面目を顯揚し來れば、吾は絶對性なり、宇宙的本體と根本的に同物なることを實證し、吾と本體と全然融渾せる境界を云へるものなり、然らば本覺法身佛と始覺法身佛とは、同か異かの疑問起るべきが、或る意味に於ては同なり、即ち本來同一性にして、又既に一味平等の歸融を見たる上は、彼れ此の差別なきを以てなり、又或る意味に於ては不同なり、本覺法身佛は材料即ち地金の如し、始覺法身佛は之を或る器具に鑄冶せるものなるが如し、鑄造せられたる金時計は、其質均しく金なるには相違なきも、金の上に時計と云ふ効用を現はし居れり、左れば本覺法身佛のみにては資料

たるに過ぎずして、資料如何に立派に、如何に豊富なりとするも、之れを精製即ち修養工夫せざれば、充分の効用を現はし得ざるが如きものなり、故に又本覺法身佛の方面より云へば、本覺法身佛の妙用を指して始覺法身佛とするものにして、更に始覺法身佛の側より見れば、本覺法身佛を開發し活用せるものなりと云ふべきなり。

釋迦牟尼佛は印度の悉多としては、丈六の應身佛なり、然れどもそが修養工夫の結果大悟徹底したる點より見れば、始覺法身佛なり、又本覺法身佛に還同一致せる境界なり、故に本覺法身佛の位置よりすれば、久遠實成の釋迦牟尼如來にして、妙用無窮徳化不朽なる點よりすれば、始覺法身佛なりとす。

第二節 法報應三身觀

法應二身佛は前述の如し、更に報身佛なる課題あり、之を合して法報應三身佛論と云ひ、佛教にては極めて重要な問題にして、頗る難解なると同時に、又異説も少なからず、蓋し法應二身論は哲學的にも充分之を承認し得べき極めて穩健適確の議論にして、何人も異議なき所なり、左れば大智度論の如きにも生身佛法身佛の二身觀を爲すものなりしが、後には三佛身乃至十佛身等の議論生じ、佛身觀は頗る復雜に赴けり、然

さども要は報身佛の解決如何に在りて、報身佛論は一方より之を見る時は、宗教の中心點なるが如し、故に報身の研究は大なる趣味と價值とを有するものなり。

報身佛とは如何、阿彌陀如來の如きもの之れなり、釋迦佛即ち生身の如來に非らず、又本體絶對なる眞如實在を名義上具體化する法身佛の他に、報身佛なる不可思議の如來、果して存在し得べきや如何、佛家にては通常法身を覺性と爲し、應身佛を覺相、報身佛を覺用と爲し、本體と形相と作用とに配當せり、法身を哲學的本體の佛、應身を歴史的の人身を有せし佛、報身を其感化力として信仰の對象たる宗教的の佛と爲すは、頗る妙味ありて、此は何人も肯定し得べきも、報身佛に指方立相を論ずるは如何、即ち例へば阿彌陀佛は釋迦と異なる形相を有して、西方なる淨土を主宰し、信者臨終の際には、優美の姿相を現はして來迎すと云ふ如き議論、其他觀音の功德論、不動明王の活躍説の如き、之を如何に解すべきか、茲は宗教上實に重大の問題なり、然れども禪家の立場より之を解する時は、極めて簡明にして一語以て之を裁斷し得べきなり、曰く報身佛の有無は、汝の信念力に包容せらる、汝若し西方に淨土あり、微妙莊嚴の彌陀佛之れに住すと確信せば、茲に忽ち指方立相の報身佛及其佛土宛然として現前すべし、

第三節 三身即一觀

由來佛教には非常に多數の佛あり、三千佛名經には三千の佛名を列記せる上に、其最後に猶之れ以上に恒河沙の諸佛ありと爲せり、最少數にして法應二身より法報應三身乃至是等多數の佛は、各自に別立獨存するものなるか、將又其關係は如何、佛敎にては之を解決するに二様の方式を以てせり、其一是、一佛多身觀にして、此れ佛は一人一體なるも、其一體の佛が種々に活動作用を現はし、變化自在の妙趣を現はすに依るものと爲せり、例へば、釋迦佛なれば釋迦一佛、彌陀佛なれば彌陀一佛、大日如來なれば、大日一佛より他に本體の佛はなきも、其作用は無限にして、或は神通力を以て多數の身を現はし、或は微妙の佛身と爲り、或は懲惡の爲め閻魔王の如き形相となり、又相手の機根に應じて、種々の身、種々の説を爲すとするものにして、此は畢竟一佛多用にて、事實佛身を多數に現はす、其作用の偉大なるを比喻せしものとの別あり、彼の千手觀音の如きは、實際千本の手を有する片輪には非ずして、救濟力の偉大を形容せしものなりとす。

其二是多佛一身說にして、此は前の逆に觀察せしものなり、釋迦も佛なり、彌陀も佛

なり、龍樹も達磨も矢張り一種の佛なり、又孔子の如き基督の如きも佛陀の一部と云ひ得べし、要するに自覺して他の模範と爲れる偉人は悉く佛陀なり、尤も其内に佛敎内の佛即ち覺者と、佛敎外、即ち外道の佛との區別あるは、兎に角偉人を以て一種の佛と觀じ、此等多數の佛あるも、畢竟すれば悉く之れ、絶對本覺法身佛の顯現に過ぎざれば、結局は法身一佛に歸すべきものなりとする説なり。

要するに應身佛の釋迦よりすれば、釋迦は歴史的の生身佛あると同時に、本覺法身佛より現はれ來たるものなれば、應法一致し、又生身佛の德化偉大なると、本覺法身佛の無限の威力と相一致して、茲に不可思議の報身佛を現はし得るものなれば、三身即一にて、釋迦に法應二身具足せりと云ふべし、又法身佛は其本具の性能より自然に應身佛と顯現し來り、修養工夫して本始一如、茲に偉大の妙用を現はすを以て、法身には應報二身本具内存せりと云ひ得べし、又報身は本覺法身を所依とするは固よりにして、又一度應身の徑路を通過せしものなるも、無住所涅槃なれば、更に又幾回にても應身佛と化現し得べく、左れば報身にも法應二身の力用を具備せりと云ひ得べく、斯く孰れの方面より觀察するも、三身即一なると同時に、又一即三、一身に三乃至幾千萬の

變化妙用を有すと俱に、三身並に幾千の諸佛は、一に歸して、華嚴の一多、主伴、隱顯、具足、重々無盡、事々無礙の妙境を活現し得べきものなりとす。

第五章 徹底的佛陀觀

第一節 是心即佛

馬祖道一禪師曰く、汝等諸人、各自心是れ佛なりと信せよ、此の心即ち佛心なりと、又臨濟義玄禪師曰く、赤肉團上に一無位の真人あり、常に汝等の面門にありて出入す、未だ證據せざるものは看よと、此れ吾人の肉體中、吾人の心裏の源底に大精神、本來佛の存在すること道破せる確言なり、道元禪師曰く、知るべし佛法に心性大總相の法門といふは、一大法界をこめて、性相をわかす、生滅といふことなし、菩提涅槃に及ぶまで心性にあらざるなし、一切諸法萬象森羅ともに、唯是一心にして、こめずかねざることなし、この諸の法門、みな平等一心なり、又曰く、有身の心あり、無身の心あり、身先の心あり、身後の心あり、青黃赤白これ心なり、長短方圓これ心なり、生死去來これ心なり、年月日時これ心なり、又曰く、古人曰く、若し人心を識得すれば大地に寸土なしと知るべし、心

を識得する時、蓋天撲落し、匝地裂破す、古德曰く、作麼生か是れ妙淨明心、山河大地日月星辰、明かに知りぬ、心とは山河大地なり、日月星辰なりと、榮西禪師曰く、大なる哉心や、天の高きも極むべからず、心は天の上に出づ、地の厚きも測るべからず、心は地の下に出づ、日月の光も踰ゆべからず、心は日光の表に出づ、大千妙界も窮むべからず、心は大千妙界の外に出づ、其れ大虛か、其れ元氣か、心は即ち大虛を包んで元氣を孕む、天地我を待ちて覆載し、日月我を待て進行し、四時我を待ちて變化し、萬物我を待ちて發生す、大なる哉心や、と、是れ宇宙的大精神と同時に、又個人的精神とを説けるものにして、又兩者の不二なるを示せるものなり。

左れば此の心即ち宇宙的大精神にして、此の心を究むれば、小なる我は大なる我と一致す、否本來一なることを發得す、既に此を發見する時は、我れ直ちに佛に非ずや、本來の佛を我に發見し、一切の諸佛一體同如、同時具在、宇宙双日なく、乾坤只一會て、外物の爲めに動かされたる我も、今は外物悉く我が眷屬屬性と爲りて、自由に指使支配し得るに至り、活殺自在與奪縱橫行くとし可ならざるなく、爲すとして是ならざるなきに至る、是心即佛の妙趣全く茲に存す。

第二節 消極佛、積極佛

臨濟の大覺禪師曰く、佛心自本無迷悟、如來妙術也、縱雖不得悟、一座禪、一座佛也、一日、座禪、一日佛也、一生座禪、一生佛也、と、正傳三昧に依り、非思量底の參禪を爲し居る者は、縦ひ大悟徹底に至らすとするも、座禪を爲せる間は、之れ即ち佛にして、自然に佛に冥合し、本來の面目に入り居るものなり、只其大悟せざるは、本室に入るも眼明らかならずして、室内の形況を明見する能はざるのみ、之れ即ち一種の消極的佛陀なり、又既に大悟すと雖も、達磨大士の如く、強て教化を爲さずして、面壁九年を専務と爲し居る如きも、齊しく消極佛なりとす。

斯の如き消極佛は小乗の羅漢と異なるなきか、曰く然らず、羅漢は既に活用の本源を斷絶す、今此の消極佛は現在活動せざるまでにして、若し機に遭ひ活動の必要ある場合には、猛然として活躍し得るの準備と資料とを有するものなり。

又消極佛は何等對他的功德なき以上は有無我れ關せず、衆生の爲めに其必要なきに非ずや、曰く決して然らず、或は説法に依り、或は作業に依りて、感化救済の活動を爲すは、固より肝要なり、然れども口一言を發せず、足一步を移さざるも、其高風清節は一

世を風化し、下手なる活動作業よりは、却つて社會救済の清涼劑と爲ることあり、特に現代の如き世の中には、最早筆舌の説法よりは、清風高操の方遙かに有効なりとす。

次に積極佛とは、釋迦牟尼佛大覺の後、五十年間斷なく、説法教化せられたる如く、衆生の利益の爲めに大々的活動を爲すものを云へるなり、然り而して此の積極佛は、獨り僧侶となり、佛道を宣傳すとか、宗教家と爲り、宗教的濟度を爲すと云ふ如き限度を有するものに非らずして、或は學者となり、或は王侯となり、或は發明家となり、濟世利民の活動を爲すも、決して不可なるに非ず、併し如何に濟世の活動を爲し、又佛教の宣布に盡力すとも、其内容に於て、其のものゝ内界に於て、本來の面目に反する底の端的伏在せんか、是れ佛陀に非ずして、佛陀に化裝せる天魔のみ、近時積極佛中此の種々の天魔殊に多し、頗る警戒を要す。

第三節 絶對靈佛

馬鳴龍樹如何に聖なりとするも、達磨は觀音の化身なりとするも、第六祖如何に天才的なりとするも、臨濟禪師、洞山禪師如何に傑出とするも、榮西禪師、道元禪師如何に大績を立てたりとするも、又行基傳教、弘法、法然、親鸞、日蓮、乃至天台大師、香象大師等

如何に超越せりとするも、之を釋迦に比せば如何、部分的に比較し批判せば、此等人師は釋迦より傑出せる點は非常に多からん、然れども其人格の大きに至つては如何、固より此等の大師は曠世の大人物大人格にして、他の英雄豪傑明哲を數百人總合するも決つして此等宗教的偉人には比儔すべきに非ず、然れども釋迦は此等人師を悉く包容して猶綽々たる餘裕あるに非ずや、此の點に於て釋迦は吾人の知れる人類界に於ては、唯一の巨人なり、大靈佛なり、法身は見る能はず、報身は容易に至らず、先佛後佛俱に我等に直接の交渉なし、只吾人の眞實に覺知せるものは、釋迦牟尼佛の大人格のみ、之れ吾人が釋迦牟尼佛を絶對的靈佛と云ふ所以なり。

更に又一轉して考案する時は、無限の宇宙そのものは其儘一大活靈なり、一大圓佛なり、森羅萬象悉く之れ此の大圓佛の活現妙用に非らざるはなく、生滅變化の中に本有常住の妙趣を現はし、參差たる差別の内に陸離たる光彩を發揮し、其光榮と妙用には日新月進次第に開發進轉し、宇宙的大目的の過程歴史は、日々作成せられつゝあり、此の宇宙的大目的の過程と吾人の精神的經歷とは全然相一致し、我と圓佛と同化して、主伴の關係も亦茲に泯沒し、本來の面目は躍如として活現し、本地の風光宛然とし

て如來す、釋迦は絶對靈佛、宇宙亦絶對靈佛、吾れ亦絶對靈佛、我れの他に釋迦なく、宇宙なし、我れ即ち現實的絶對靈佛なり、雲門大師曰く、

乾坤之内、宇宙之間、中有一寶、秘在形山、拈燈籠、向佛教裏、將三門來燈籠上、

僧あり、瑯琊覺和尚に問て曰く、

法淨本然、云何忽生、山河大地、覺曰く、清淨本然、云何忽生、山河大地、

僧あり、從諗禪師に問て曰く、如何か、是れ佛、禪師答て曰く、或る時は單に佛と云ふ、或る時は殿裏底と云ふ、臨濟禪師曰く、

汝等祖佛と別ならざるを要すべし、若し祖佛と別ならず、同居せんと欲せば、外に求むること莫れ、汝が一念心上の清淨光は、是れ汝が屋裏の法身佛なり、汝が一念心上の無分別光は、是れ汝が屋裏の報身佛なり、汝が一念心上の無差別光は、是れ汝が屋裏の化身佛なり、此の三種の身は、是れ汝が即今目前聽法底の人なり、祇だ外部に向ひて馳求せざるがゆへ、此の功用あるなり、故に切に望む、外部に向ひて求めざるを、

僧慧超なる者、法眼禪師に問て曰く、如何か、是れ佛、禪師其聲に應じて曰く、汝是慧超

第七編 大悟觀

第一章 修證の關係

第一節 修證不二

修とは修行なり、修養なり、向上の工夫なり、大悟界に達せんとする精進努力なり、證とは目的を達したる到着點なり、覺悟なり、徹底なり、卒業なり、終了なり、修すれば必ず證あり、修なきの證は絶對に有り得べからず、修は原因にして始めなり、手段手法なり、證は結果にして目的なり、左れば方法手段たる修行は、其形式異なるも不可なし、他力的念佛道より入るも可なり、默照禪も可也、看活禪も亦可なり、要は證悟に在り、所謂戰の要は一に勝ちに在りと一般なり、然れども又一方より見る時は、目的同一なりとするも、其方法手段に巧拙適否ありて、方法を誤れば到底目的地に達し得ざることあり、左れば修の本則として正傳三昧に據るべきは、固より論なき所なりとす。

然り而して修と證とは、本來原因と結果の關係なるも、修中には必ず證を含み、證中又修を見るべし、例へば百圓の金は一圓宛の蓄積にして、一圓宛の貯蓄は修にして、百

圓に達したるは證なり、左れば證の百圓中には一圓宛の修を含み、又百圓の證より一圓宛の修を取り去れば最後には一文無しとなりて、證も亦無に歸するに至るべし、因中果あり、果中因あり、因果一體不二、修證不二一如なり、故に修外に證を求むべからず、契嵩和尚曰く、

夫れ妙心は修の成す所に非ず、證の明らむる所に非ず、本成なり、本明なり、明に迷ふ者明に復るを以て證する所以なり、成に背く者成に復るを以て修する所以なり、修に非ざるを以て之を修す、故に正修と云ふ、明に非ざるを以て之を明す、故に正證と云ふ。

又道元禪師曰く、

修證は一つに非ずとをもへるは、即ち外道の見なり、佛法は修證これ一等なり。以之觀此、證佛を目的とし、又希望して修行するの要なく、單に正傳三昧に由り、正規の參禪を爲せば、其中自ら證佛あるものなり。

第二節 無修無證

無修無證とは、之れ大悟徹底の境界を云へるものにして、眞に本來の面目を發揮し、

本地の風光を撞觸したる以上は、自己の本性も、宇宙の真相も、能く知悉し了りて、萬象の明鏡に映するが如く、何等の隠れたるものなく、自己本來の證佛なれば、證悟の意義自ら滅却し、既に證悟の意義を失すれば、修の意も亦消散し、修もなく、證もなく、修と證との區別もなく、我は修行せりとか、證悟せりとか云ふ臭氣考量を全然脱却したるの謂なり、六祖壇經には、無修の修之を眞修と云ひ、無證の證之を眞證と云ふと云ひ、又臨濟の慧照禪師は、如何なるか是れ佛魔の間に答へて曰く、無修無證、無得無失、一切時中無別法と、

我は斯く修すと云へば、最早有相の見なり、之れ所謂爾は六度萬行齊しく修すと云ふ、我見皆これ造業にして、修に捉はれたるもの、執着の見を離るゝ能はざるものなり、又我は斯く證悟せりと云はば、本來の面目を無視するものなり、證悟せるに非ず、本來の面目顯現せるまでなるを、證悟すと云へば、證悟そのものは本地の風光に一團を點せるものにして、玲瓏明淨なる月光に一片翳を掩ひ、白淨鮮麗の帛上に、一汚點を染せしもの、證に縛せられ、悟に繋かれ、無碍自在の妙用を拘束し、臭氣紛々たる魔證魔悟に墮するに至るべし。

要するに無修無證は修をも證をも超越して修して修を知らず、證して證を感せず、無修無證は法爾自爾の作動たるに至る境界、即ち眞の大悟界に闖入し、本地の風光を其儘に體見したる状態に附したる形容詞なりと知るべきなり。

第三節 本證妙修

本證妙修とは、修證不二、修證一如を無限に連続せしむることを意味するものにして、無修無證の境界に在りて猶修證を怠らざるものなり、道元禪師曰く、今も證上の修なる故に、初心の辨道即ち本證の全體なり……、かるが故に修行の用心を避くるにも、修の外に證をまつと思なかれと教ゆ、直指の本證なるが故なるべし、既に修の證なれば、證に際なく、證の修なれば修に始めなし、又曰く、妙修を放下すれば本證手の中にみたり、本證を出身すれば妙修通身に行はると、今之を解剖するに、修證は非一、非二、非非一、非非二にして、結局言亡絶慮なり、故に證の前に修あり、證上に修あり、證後に修あり、修は無限に修せざるべからず、之を妙修と云ふ、又修先に證あり、修上に證あり、修後に證あり、故に證は本有なると同時に、又修上の果として無限に發現す、之を本證と云ふ。

要するに本證は修先の本有、何人も未生以前より有する久遠實成の佛性あるを云ひ、此は決つして修後ならざるを示し、而かも此の本證の活力妙用迷雲の爲めに、明らかならざる故、修を要す、之れ證の上の修なり、修の局大悟して自己の本性に撞見すれば、我れ本來の佛なるを知る、之れ修後の證なり、既に修後の證ありて、一段落を告ぐるも、修は猶連續して怠らず、之れ即ち妙修にして、卒業せしとて猶研究を怠らず、富貴に爲りたりとて、猶増殖を止めず、無限に發展しゆくの云なり。

本證妙修は曹洞宗にて尤も主張する所にして、彼の眞宗にて往生決定の上は、報恩謝徳の爲めに踴躍歡喜して念佛を唱ふべしと云ふ意義と大に類似せるものなり、又眞言宗にて成佛の上は、更に變化して身を衆生界に下し、方便して俱に佛道を成すと云へるも、結局同一意味ならずんばあらず。

第二章 凡聖の關係

第一節 生死と涅槃

生死には吾人凡夫の分段生死を始め、阿羅漢、辟支佛、大力の菩薩の意生身の變易生

死等六種又は七種の生死ありと爲すも、要するに轉變無常を意味するものなり、又涅槃にも有餘涅槃即ち煩惱は盡き果てたるも猶肉身の存在するもの、無餘涅槃即ち煩惱も肉身も滅盡せるもの、其他三種の涅槃、四種涅槃等と説くも、要は大滅度にして、常住不變の境界を指せるものなり。

轉變無常の生死と、常住不變の涅槃とは正反對にして、雪と墨との如きものなるか、此の兩者は如何なる關係を有するものなるかに就きて、佛教の解決に數種あり、従つて、大小乗權實等の分派を生ずるに至れり、禪家にては、生死即涅槃と觀するを常とす、正反對の動と靜、無常と常住と何故に不二なるかは、大なる疑問の存する所なるが、其解説に二様あり、曰く、涅槃は生死の中に在り、生死を離れて涅槃を求むるは、全然無意義なり、元來生死涅槃は一物を兩様に觀たるものにして、動的方面より見て生死と云ひ、靜的方面より見て涅槃と云ふ、例へば水は一物なり、其波の側より見れば波と云ひ、靜なる側より見れば水と云ふ、波を離れて別に水を求むるは愚なると俱に、水を外にして波を論ずべからず、結局水波は一水の動靜二面なり、故に生死以外に涅槃を求めんとすれば、遂に何ものをも得る能はず、左れば生死涅槃は水波の如く、其根本に於て

一なり、相に於て動靜の異を假表するに過ぎずと爲すものなり。

又一の意にては、吾人は本來涅槃の床に常住するものなるも、之を覺知せずして生死無常と誤解し居るものなり、故に自己本來の性能を覺知すれば、生死即涅槃、生死と涅槃と同一なること、猶進んでは生死涅槃の別なきのみならず、生死もなく涅槃もなき、只有の儘の實相を見るに至るべきものなり、例へば豪家の嗣子自己が相續者たることを知らずして、丁稚小僧として自家に使役せられ居るも、一旦其家の相續人たることを知る時は、丁稚即若旦那にして、丁稚と若旦那と二人にはあらざるが如きを云へるなり。

僧あり守仁禪師に問て曰く、如何なるか是れ涅槃、禪師答て曰く、生死と、又定山和尚曰く、生死の中に佛なくんば生死に非すと、夾山和尚曰く、生死の中に佛あれば生死に迷はずと、道元禪師曰く、生死すなはち涅槃とこゝろへて生死としていとふべきもなく、涅槃として欣ぶべきものなし、この時始めて生死を離るゝ分ありと、又曰く生死は佛の御命なりと。

要するに大悟の見地より見れば、生死を離れて涅槃なく、生死涅槃の區別さへ無用

に屬するに至るものにして、生死と涅槃とを分別して考ゆるは、之れ即ち迷見なり、生死ある所以なりとす。

第二節 煩惱と菩提

佛教にては三毒五欲百八煩惱、八萬四千の塵勞と稱し、精神的昏惑の苦痛を各種の方面より説示せり、又菩提にも五種、三十七種の分類ありて、解脱、寂定、大道、安樂等の意を示せり、要するに煩惱は苦痛にして、菩提は安樂なり、又煩惱は罪惡にして、菩提は善なり、徳なり、煩惱に苦しめらるゝは凡夫なり、煩惱を脱却して菩提を得たる者は佛なり、故に兩者は天地雲泥の差異あるが如きも、而かも煩惱を離れて菩提は求むべからず、凡夫なくして佛あるべきの理なし、自我を中心として貪瞋痴を恣にするは煩惱にして、他我の爲めに貪瞋痴を活動せしむるは菩提なり、佛の慈悲と凡夫の貪慾と其心體に於て別なるに非ず、佛か一切を救濟せんとする思念も慾に相違はなきも、自己の爲めにせざる故慈悲と云ひ、菩提と云ふ、凡夫が資生利養の爲めにする慾も慾の心體は一なり、故に菩提と煩惱とは其根本に於て一體なり、只其發現の對手を異にし、方向を別にするのみ、左れば一旦豁然として此の理を覺悟する所は、煩惱として厭ふべき

ものなく、菩提として學ぶべきもなく、何を呼んで煩惱と云ひ、菩提と云ふべけんや、煩惱もなく、菩提もなく、あるものは單だ法爾自然の大活力のみ、圓悟禪師曰く、更に何を喚んでか涅槃生死、煩惱菩提とか作す、饑來れば飯を喫し、因來れば打眠するに如かずと。

要するに煩惱即菩提にて、無我となり、自己中心を捨て、大煩惱を働く時は、之れ佛なり、煩惱を煩惱と知りて執着せず、之れに捉はれ苦しめられるは即ち菩提なりとす。

第三節 迷悟不二

迷とは眞理に闇く、實相に迷ふものなり、悟とは實相を識得したるなり、而かも此の迷悟は本來不二にして分別すべきものに非ず、何となれば迷見を以て見るも、其の現實相は矢張り眞理實相にして、眞理實相そのものに何等の變更あることなし、例へば繩を蛇と見るも、繩を繩と見るも、繩そのものに何等の變化を生せず、又迷ふ心體も悟る心體も、心體そのものに差異もなく、變化もなきものなり、例へば人を水に陥れんとして擠倒する手も、水に溺れ居るものを救ひて引上げる手も、手そのものは同一なるが如く、吾人は常に一本の手を善惡兩様に使ひ分けつゝあるものなり、左れば識別せ

らるゝ眞理實相の方面より見るも、識別せんとする心體の方面よりするも、迷悟は根本的の分別に非ずして、單に心的作動の上に現はる一時の活動に過ぎざるなり、左れば此の不二の理に體達すれば、迷悟一如なるのみならず、迷悟なるもの全たく斷滅してあるものは、自然の現象のみとなり、山は高く、川は低く、柳は綠、花は紅の本地の風光を體見し得べきなり。

然らば一時轉動的の迷悟は何に由つて起るか、此れ凡夫は有と云へば有に執し、無と云へば無に執着し、有に付て何故に有かを工夫し、無に付て如何に無なるかを考へ、思慮分別を有無の上に加へて、自苦自繋せられ、遂に冥より冥に入るものなり、之れに反して悟界に在りても有は有なり、無は無なるに相違なければ、有無を其儘に觀して、敢て有無に捉はれず執着せず、悟の執すべきなく、迷の去るべきなく、本來法爾の實相をその儘に觀じて、何等轉倒することなきものなり、佛眼禪師曰く、迷は悟に迷ふなり、悟は迷を悟るなり、迷悟は同體なり、悟者にして方に知ると、又假名法語に曰く、自ら我を知るや、通身是佛性、通身是大道、道體もとより清淨にして一切の相を離れたり、何の病もあるべき、是れ諸佛の本源、諸人の自心、本來の面目なり、是れ見聞覺知の主人公な

り、是れを悟れば佛なり、是れに迷へるは衆生なり、故に佛祖みな直に人心を指して性を見て成佛せしむ、たとへば影にまどへるものは形を見るにしかざるが如し云々と、迷故三界城、悟故十方空、空中には迷悟なきなり。

第三章 徹悟の心地

第一節 心身脱落

道元禪師宋より歸朝せる時、無手にして郷に歸ると云ひ、又或る時拂子を以て一圓相を畫き、その一圓相を打つ眞似を爲して、身心脱落、用て勤めすと示し、又一圓相を打して、脱落身心、寂にして滅せずと示せり、此れ初めの一打は身心に執着せざるを意味せり、我に我が身心ありと執するは、常見にして、我見我慾續て起り、愛憎偏執を増長す故に一切の迷見は我が身心を起本と爲す、既に此の心身に執着せず、之を打遣し放下すれば、何等の迷見偏見因つて起ることなし、又後の一打は前の呵遣に執着して、空寂恬無に終るは、此れ斷見にして、一切の功德を滅絶す、寂なるも滅せず、心身のあることは確かなる故、之を自然の活動に任かすべしとの意なり、斯く斷常二偏を離れ、自我本

位の身心を放遣し脱落して、實相的本體的の身心その儘の活躍を爲すもの、此れ禪家の悟界なり。

凡夫は此の小さき心身に執着して、益々之を縮少し、悟者は小なる自我を放下して、宇宙的に擴大す、小なる身心を脱落せざれば宇宙的實在的活躍を發露する能はず、故に身心の脱落は虚無を意味するに非ず、又空寂不動枯木死灰の如くなるべしと謂ふにも非ず、鐵悟を脱し、繫縛より免かれ、恰かも籠より出でたる鳥の如く、其自然の天賦に任せて、自在に空中を飛翔する底の境界を實現せしめんとするに在り。

「無手にして郷に歸る、即ち迷界一切の執着を放遣して本來の面目坊その儘に、大悟の本地に歸れるもの、道元禪師の一語、即ち禪家の究竟一大事を道破せるなり。」

第二節 本來の面目

迷悟と云ひ、煩惱菩提と云ひ、生死涅槃と云ふ、此れ假定的相對的の區分にして、迷と云ひ、菩提と云ひ、涅槃と云ふも、大悟界に於ける真相には非ず、大悟界は此等の兩端を離れたる唯一なり、絶對なり、之を本來の面目と云ふ、本來の面目と云ふ語は、菩提とか佛性とか云ふ語よりも、頗る穩當にして又稍々實際に近し、吾人凡夫と雖も、佛祖と何

等相違なき本性を有する久遠實成の佛なり、佛たるが本來の面目にして、凡夫たるは假偽の面目なり、故に迷に對して悟と云ふも、悟別に存せず、本來の面目を發現したるまでなり、例へば衣裏に百金あり、忘れて貧と爲し、食を乞ひ憐を乞ふ、然るに一旦衣裏の大金を知る、此の大金は拾ひたるに非ず、盗みたるに非ず、貰ひたるに非ず、働きて得たる勞金にもあらず、本來我が有なり、圓悟禪師曰く、本來これ佛、成不成なく、正體湛然たり、出石出を離れて、本分事上直ちに萬里片雲なきことを得んと、道元禪師は、身心自然に脱落して、本來の面目現前せんと云へり、此れ凡夫なりと云ふ執着を離れ、又佛に成らんとか、或は佛なりとの執見を離るれば、本來の面目現前するの謂にして、本來の面目は悟に非らず、固より迷に非ず、凡夫に非ざると同時に、又佛にも非らず、假りに名づけて佛と云ふと雖も、實は只本來の面目にして、風は颯々、月は皎々、鳥は啼々、腹が減すれば食を欲む、此れ丈の事のみ、要するに一切の虚偽を離れ有の儘なる所、之れ本來の面目にして、世間に云へる意味と何等異なるなく、何もかも打ち明け赤裸々にして、赤子の心に返れるもの、之れ即ち假りに悟と云ひ、佛と云ふ、結局有の儘の實相なり。

第三節 本來無一物

支那の第六祖慧能禪師、菩提本と樹に非ず、明鏡亦台に非ず、本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かんと、本來無一物の語此より大に威力を逞し、爾來禪家の表看板と爲れり、無一物と雖も、人もなく、天地もなく、山河もなきに非ず、有る物は悉く有の儘に存在せるなり、然らば無一物とは如何、曰く、迷見執見に依つて、先づ我非我を分ち、其分別次第に發展して、迷悟を云々し、凡聖を云々し、我他彼此、複雑に複雑を極め、遂に以て娑婆世界の現狀を醸造し了れるなり。

父母と云ひ、妻子と云ふ、山と云ひ、河と云ひ、苦痛と云ひ、安樂と云ふ、花と云ひ、雪と云ふ、之れ何人の命名せしものか、思慮分別して名を附し、説明を附し、猶進んでは一切のものを自我の爲めに専用せんとす、其困苦勞作甚だ大なりと云ふべし。

山を推究せよ、川を推究せよ、父母の父母を推究せよ、結局何ものに到達すべきか、玄の又玄、名の名づくべきなく、物の執すべきなきに至らん、此れ即本來無一物也、又我が現實の身心を推究せよ、遂には何等執すべき中心點を見出す能はざるに至るべし。

執すべきの一切は悉く打破せられ、無執の下に有々として、森羅萬象、光彫陸離たるもの、之れ無一物の眞意義にして、又宇宙の實相なり、要するに無一物は皆空の無に非

ずして、有に執せざる無なりと知るべし。

第四章 悟後の住地

第一節 本地の風光

身心脱落して、本來の面目現前し、有無の執を離れたる、本來無一物の境界に到達し、而かも此の無一物界裡に、森羅萬象有々森々たるの妙趣を呈するもの、之を本地の風光と云ふ、本來の面目も、本來無一物も、本地の風光も、畢竟同一境界なるも、面目は自性の本相より之を云ひ、無一物は執着を離れたる妙境に就て命名し、本地の風光は、無一物より積極的に實相を觀じたる狀勢なりとす、而して風光は、悟徹して始めて現はれたるに非ずして、本來我が所有なりし故、本地と稱せしものにして、大悟界は極めて立派なるものにして、又非常の遠距離の如く思惟せしに、全く自家の屋裏心内に在りて、近しと云ふよりは、同在同所なる上、如何なる莊嚴微妙の佛陀なるかと思ひしに、豈圖らんや相遭ふて見れば、矢張り自己に外ならざりしなり、左れば迷悟共に斷滅して、無一物と爲れり、既に無一物と爲れるも、迷悟我他彼此を離れたる一切萬有は森々と

して光彩を放てり、此れ即ち本地の風光なり。

此の風光を自受法樂して、綽々自適し、悠悠追らず、苦樂迷悟に超越して、而かも苦樂迷悟に順し、自然天真の行動に出づるもの、之れ即ち悟後の住地なり、真歇禪師曰く、而前明々了々として、天地に彌滿するは、またこれ何物ぞ、恁麼に傳得し去らば、便ちこれ自己本地の風光、本來の面目、晝夜放光動地、常に面前に在つて出入せん、永嘉禪師曰く、眞をも求めず、妄をも斷せず、二法空にして無相なることを了知す、無相は空にして不空もなし、即ち是れ如來の眞實相と。

第二節 涅槃妙心

涅槃は本來靜寂無爲を指すものなるも、本地の風光に接着せる涅槃界は、寂滅の涅槃に非ずして、無住所涅槃なり、心源を覺悟し、本地の自境界を逮得せし状態、即ち之れ無住處涅槃にして、其靜なるや泰然として山の如く、枯木死灰の如し、然れども死滅に非ず、斷無に非ず、休養なり、靜養なり、靜止は第二の活動を勃起する準備なり、故に機至り時應すれば、猛然として起ち法爾の大活動を開始し、適くとして可ならざるなく、爲すとして當らざるなし、之を涅槃妙心の眞際と爲す、所謂無作の大作、無爲の大爲、法爾

法然の大活動之れなり。

靜より動を起し、動より靜に入り、變通自在、順逆無碍、發して節に中り、止まるべきに止まり、動くべきに動き、順に在つても傲らず、逆に在つても亂れず、大厦高樓に在つても廣しとせず、三尺屈身の茅屋に在つても陋とせず、苦樂に即して苦樂に累せられず、慧曉和尚の入寂の偈に云ひし如く、來如是、去如是、更問如來、如是如是の心地に住し、宇宙的究竟目的の進履に參仕して、共に其過程史を編成し、圓悟禪師の、直下三世の諸佛と同生同死し、火焰と同起同滅し、當處に解脱して大安穩を得との開爐の偈に云へるも味あり、雲門禪師の、春になると草木青々生へるとか、南の方へ向つて見へるとか云へる如く、自然の境界、自由自在の心地を現前し、又青原和尚の佛法と世法と異とせんか、不異とせんかの間に對し、廬陵縣の米相場は如何と答へたる如き、慈照禪師の、車碾馬踏と云へる如き、孰れも涅槃妙心の活潑地、道體本有の妙用を喝破せるものならずんばあらず。

第三節 現實の淨土

外境は善にも非ず、惡にも非ず、苦にもあらず、樂にもあらず、彼等は單に自然の理法

に従ひて動靜するのみ、左れば外境を採つて苦樂善惡醜美を分つは、我精神作用に過ぎず、縦令ば鶯の鳴くは其本能に由り、兩性相呼ぶものにして、吾人に快感を與へ或は不快の感を與へんとする意思なし、然れども吾人は鶯の聲を聞きて快感を起すは、吾人が勝手の精神作用に非ずや、猫は決つして惡意を以て叫べるにはあらざるも、吾人は之を嫌厭す、旭日海の彼方に差異る雄偉の光景は、吾人に何となく強剛雄大の感を起さしむ、然れども此れ太陽が吾人に對して何等思惑を有するに非らず、公轉自轉の理法に由りて自然に現はれしのみ、故に心機一轉すれば、不快の感も快感と變じ、快感も不快となることあり、前編に述べし如く、隣家の夫婦喧嘩は極めて蒼蠅きものなれども、心機を一轉せしめて、之れ無料の芝居見物なりと觀せば、觀じ得られざるに非らず、斯くの如く、事々物々悉く樂化し了れば、即ち是れ娑婆即寂光の淨土と轉現し、一切の苦痛も苦樂を超越したる眞樂大樂と化し來るべし、之れ所謂現實の淨土なり。

左れば西方に淨土を求むる必要なく、又十萬億土の遠距離を涉獵するの面倒もなく、心機一轉、思ひ直し、思ひ方一つにて萬事解決し了るものなり、故に禪家にては、唯心の淨土を了し、自性の彌陀を見る、此界他方隨處に快樂と云へり、斯かる境界に至れば

粗飯も百味の御食と感せられ、山河大地悉く光明に満ち、我も亦光明界裡の人、他も亦光明界裡の人、禽獸蟲魚皆佛陀の相を現し、實在の風光全身暴露し來りて、其妙趣、其光景、其體容、謂はんと欲して謂ふ能はず、松島や松島や、これはくゝとばかり花の吉野山の眞面目、只嬉し、有り難し、見事なりと云ふの他なく、本來の面目至る所に活躍し、本地の風光躍如更に躍如たるのみ。

第五章 徹悟の熟否

第一節 病悟と眞悟

禪は實學なり、法身機關、言詮難透の四種類の公案を通過し、有無回互轉變窮りなき五位の妙趣を研究し盡し、十重禁より千七百則の修行悉皆終れりとするも、知行一致せざれば何等の益なきのみならず、如何に禪理に透徹し、悟境に進みしものと雖も、知るのみにては却つて害あり、寧ろ不知に若かざるなり。

病悟とは語弊あるやも知らざれど、要するに禪中毒なり、更に切言すれば公案中毒なり、腦中に偉大なる識見を有して、實行の之れに伴はざるものなり、古來此の弊は甚

だ盛んにして、禪學者と云へば、一種の狂人視せられつゝありしものなり、近時禪學の流行に就て、此の流弊は特に甚しきを加へ、實用的の禪は遂に一種の詭辯的哲學と爲りたり、又其師匠たる者も全然俗化の極に達し、知名の大家と稱する老禪師連すら、頼りに世に媚び、或は富豪、或は學者、或は權門、或は婦人等の參禪するものあれば、親ら幫間の勞を執り、曖昧極まる所見に關して、允可を與ふる等實に嘔吐に勝へざるものあり、斯くして允可せられたる參禪者は、天晴れ大悟徹底せりと爲し、白晝大道を横行濶歩して得たりと爲す、何ぞ知らん其實常識以下の癡狂に類するものならんとは、之れ學問に非らざる禪を學問に墮せしめ、理屈に非ず、翫弄に非らざる禪を、餘り安賣せしに基きしものなり。

禪の修行は命賭けならざるべからず、提唱、看話、固より不可なるに非らず、されば座禪はそれ以上に重要なり、要するに今日の禪は面壁の功を積むこと、極めて不充分的なり、之れ病悟、病禪の起る所以にして、病悟は遂に其人をして不具者たらしめ、學者にも非ず、愚者にも非ず、常識家にも非ず、一般に通用せざる大見識のみ有して、事實の上に應用するを得ず、結局一種の空想家空言者に了るのみ。

之れに反して眞悟者、實悟者は、其知る所は極めて乏しく、否、寧ろ何等知る所なくして、只自己の心身に實行の神威を蘊蓄し、言ふことと行ふことは同時なるか、若しくは行ふて而して後に言ふか、或は所謂不言實行するもの、否、否、不言實行には非ず、不知實行なり、此の實行の威力は公案の研究のみにて得らるべきものに非ず、先づ充分に座禪の修行を積み、然る後雲水の修行を勵み、樹下石上に眠る底の實修を要するものなりとす。

第二節 死悟と活悟

死悟とは何ぞや、此れ前の病悟と殆んど相似たるものなるも、其間又多少の差異あり、死悟の悟道は寧ろ病悟のそれよりは一步を進み、眞に自覺大悟の境界に入りしものなり、自己は既に悟徹せるも、其悟境を取つて以て實際社會と交渉し、實際生活と同化せずして、遂に仙人流の枯禪に墮するものなり、例へば多くの盲者ありて、四辻に迷ひ喧きつゝあるに際し、路傍の高所に位置を占めたる明眼者あり、此等衆盲の困迷を目撃しつゝ、泰然默然として、我不關焉たる如き態度に出づるもの、之れ即ち死悟なり、死悟は斯く實際生活と沒交渉なるの缺點あるも、病悟よりは價あり、即ち己を誤り

不具者と爲ることなく、又時には社會に一陣の清風を寄贈することなきにしも非ず、左れど禪の本領は何處までも活學なり、實學なり、生氣發洩として活社會に處し、偉大の活躍を爲すに在り、千日智を研かんは一日道を行ふに如かず、石頭大師は、觸目道を會せずんば何んぞ路を知らんと云ひ、道元禪師は、此の一日の行持は諸佛の行事なりとか、平常心是道とて、佛法と世間相の資生産業と相違せざることを示せり、中山の智魚老師會て大黒屋傳兵衛を訪ふ、傳兵衛時に帳合を爲し居れり、老師進み問て曰く、傳兵衛氏何をか爲すと、傳兵衛答て曰く、大般若の轉讀中なりと、老師又曰く、其功德如何と、傳兵衛曰く、父母妻子其他の召使まで飢寒を凌ぎ、又貧民をも救ひ得と、傳兵衛の如きは參禪せざるも、能く禪の面目を諒解せるものと云ふべし、藤原惺窩會て枯禪者流を罵て曰く、

我が儒は明鏡の如く、物來れば即ち應ず、釋氏暗鏡の如く、却つて物と棄絶す、鏡中本來固有の明之を暗まさんと欲す、これ理を害するなり。

之れ慥かに死悟に加ふべき一大鐵挺なり、これに反して活悟は、所謂東涌西沒、逆順縦横、與奪自在にして、如何なる時代、如何なる社會に處するも、充分に自家人格の偉力を發揮して濟世利民の實績を擧げ、如何なる境遇、如何なる困難に遭遇するも、綽々として餘裕あり、變通自在にして、大節を全ふし得るものなり。

第三節 魔悟と殺悟

魔悟とは何ぞや、曰く高慢狂なり、前の病悟は單に多少の公案を研究せし、半身不隨の禪なるも、此は決つして然らず、公案の研究も盡し、坐禪も充分に修行し、事實上本地の風光に接し、實行の活力をも相應に馴養し得たるものなり、然るに悟後の修養を爲さずして、天狗界の魔道に墮せしもの、所謂悟り臭きもの、坊主の坊主臭きものなり、彼の有名なる熊澤蕃山と禪僧との問答の如き、以て這般の消息を示せり、蕃山問て曰く、路に遺金あらば之を如何にせん、僧昂然として曰く、一顧に値せずと、蕃山笑ふて曰く、余は則ち然らず、收めて還り遺主を求めて之を返さんと、固より此等は眞の悟境に達したるものには非ずして、生兵法大疵の基たる類なるべきも、數十年の久しき苦心慘憺の功を積みたる天晴大智識然たるものにも、此等の似而非豪傑、運多きは、吾人の常に目撃する所にして、此れ實に禪の信用を害し、其眞價を危ましむる原由となるもの、所謂獅子身中の蟲たるなり。

殺悟とは所謂洒落禪之れなり、蹤あるは寧ろ眞悟の瑕疵なり、一休禪師の如きは、一般の社會に對しても、將又禪家者に對しても、偉大なるあるものを與へる巨人なり、然れども禪悟の眞髓より見るときは、頗る議論を挟むべき間隙あり、如何に善解するも本地の風光其のまゝとは信じ得られざるなり、然るに一休禪師ならぬ底下の鈍僧輩が頻りに之を學び、奇拔洒落を以て禪の眞面目、禪の第一義と考へ、公衆の面前に於て、臆面なく曲藝的洒落を演ずるは、寧ろ抱腹の至りにして、之れ正しく禪を以て幫間化せしものなり、此等は固より禪の影を追へるものにして、其體を得たるものに非ざるは云ふまでもなき所なり、正三老人曰く、

洒落佛法、拔殺坐禪は何の用にか成らん、眼を据へ齒を噛み占め果し眼になりて、群がる敵中に躍り込み、敵の槍尖に突き立ちたる覺悟を以て修行すべし。

と此は修行に就ての心得なるも、悟得にも此の心得は肝要なり、固より綽々たる餘裕はなかるべからず、左れど世態事物を滑化するは、決して正道に非ず、眞面目と一生懸命は、達人不斷の住地なり、如何なる事物に對するも誠意を以てし、如何なる場合に際しても命懸けにして、而かも又生死交頭裏に閑日月を有するを、徹底的大悟境と爲

す、悟者と雖も悟得の修養を怠れば、必ずや殺悟若しくは魔悟に際するものなり、此等は禪悟の自殺と稱すべきものなりとす。

昔者黃檗禪師、七尺の軀、額に圓珠あり、日に七百拜を行ひつゝ、佛に著て求めず、法に著て求めず、衆に著て求めず、常に禮することは、是の如しと喝破せり、此の如き敬虔の念、此の如き崇高の識、此の如き海濶の量、以て現代禪家者流の憶念すべき指針たるに非ずや。

西來の祖道我東に傳ふ。月に釣り雲に耕して古風を慕ふ。

世俗紅塵飛んで到らず。深山雪夜草庵の中

題 山 居

(永平道元)

第八編 禪の實踐道

第一章 豫備の分別

第一節 公案と非思慮

禪の修行は大別して之を三と爲し得べし、曰く一は小乘禪師即ち全然無意識状態の打坐にして、灰身滅智を究竟とす、二は公案禪にして、禪門關係の諸書其他經論の提唱を聽問し、更に師家より問題即ち公案を與へられ、之れに對する自家の所見を呈して、其熟否を質し、漸次轉進して允可を受くるもの、所謂漸悟の梯子禪なりとす、由來公案とは唐代より濫觴し、例へば達磨と武帝の問答に就て、後世此の間の應酬の意味不可解なるより、大に工夫して其眞意を明らかにせんとするより、一箇の公案と化せられたるが如く、公案なる名稱は、緩急難易を問はず、一々必ず處理するを要すること、恰かも公府の文案に類せるに起因せるものなり、公案の數は通常千七百則と稱し、古則も五位も、十重禁も皆公案の部類と見るべし、然れども公案は決つして其數に制限あるものに非ず、森羅萬象悉く公案にして、吾人が修禪懸問たらざるものなし、左れど公案そ

のものは手段なり、即ち指月の指なり、故に公案通過せりとして、目的を逮得せるには非ず、本地の境界は必ず體得を要す、若し夫れ單に公案終了を以て能事と爲さば、之れ教禪と撰ぶ所なく、禪宗の禪は滅却し了らるべし、但し現代人士は理性の發達著しく、之れに反して意志の力頗る薄弱なり、故に初めより辛竦なる手段を以て頓悟の域に導くこと難く、又面壁打座幾十年の辛棒を能くするもの少なし、此を以て漸悟を表と爲し、公案に依つて暫く理性の慾求を淨化するも亦止む得ざる所なりとす。

公案と打座と合せて之を參禪と云ひ、師家に參して所見を呈し、又法規に依つて打座するものなり、參禪は又入室と云ふ、之れ師家の室に入つて所見を呈し、其判定を受くるには、他の邪魔を嫌ひ密室を尙ぶ故に入室の語起りしものなり、然れども師家の有無に關せず、單に坐禪を爲すをも、亦參禪と云ふ、蓋し參の文字に拘泥せざるなり。

三は非思慮禪とも稱すべきものにして、之れ小乘禪の無念無想にも非ず、又大乘諸禪の如き觀法念佛の目的ある禪にも非ず、又公案を工夫するにも非ず、樂山和尚の所謂非思量禪之れなり、非思慮禪は小乘禪の無念無想と似て非なるものにして、小乗は意識を滅却する方針を主とするも、非思慮禪は精神を統一して、之れに活力を濫蓄せ

しむるものにして、彼は消極無活動、此は積極的にして活動の素地を馴醸するものなりとす。

六祖慧能禪師曰く、汝若し心要を知らんと欲せば、但だ一切善惡すべて思慮することなかれ、自然に清淨の心體に入ることを得ん。

道元禪師曰く、諸縁を放捨し、萬事を休息して善惡を思はず、是非を管すること莫れ、心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止めて作佛を圖ること莫れ。

又曰く、箇の不思慮底を思量せよ、不思慮底如何か思慮せん、非思慮是れ即ち座禪の要術なり。

此等の言に由て見るに、大乘禪の作佛觀念を打破するに努めたるも、不思慮底を思量すと云へる以上は、純然たる灰身滅智主義に非らざるは固よりにして、禪家の座禪が生理的注意を怠らざるのみならず、身心相關の調節を重じ、道元禪師も現身の大切なることを極言せるを見れば、小乘禪と大差あるを知るべく、只正式の座禪法に依りて兀々として打座する時は、其裡自ら精神の統一を得、本來の面目を發揮し來るものなり。

第二節 小乘禪と大乘禪

此は前節より大要推知し得べきも、猶叩いて之を盡さんに、所謂禪家の禪は、小乗の消極禪と大乘の作佛禪とを最も嫌ふものなり、小乗禪は心身を非常に虐待する故之を萎靡不振の極に陥れ、實際生活と交渉するの生氣を失ふものなり、尤も此は小乗禪の希望する所なるも、斯くては宗教と人生との關係は、全たく了解すべからざるに至るべし、又小乗禪の弊害とする所は、止動歸止、止更愈動に在りて、阿羅漢果に至らざるに先ちて、早くも墮落するもの多きこと之れなり、要するに小乗禪の主義目的は學ぶべからず、然れども其方式たる、數息觀の如き、不淨觀の如き、因緣觀の如き、念佛觀の如き、慈悲觀の如きは、悉く佛門に入るべき甘露の妙味にして、此等五停心觀は、禪家に於ても之を補助觀として採用せる如く、小乗禪にも大なる長所あれば、一概に排斥すべきにあらざるは固より、僧侶たる者は其初めは却つて小乘主義たるを佳と爲す。

大乘禪は概して作佛觀なり、成佛せんとの希望を以て座禪觀念するは、既に一つの目的に捉はれたるものにして、非思慮に非ず有所得の偏見なり、執着ある觀法なり、百丈懷海禪師は之を戒めて曰く、汝等先づ諸縁を歇め、萬事を休息し、善と不善と世出世

間の一切の諸法皆記憶することなかれ、身心を放捨してそれをして自在ならしめよ、心木石の如く辨別する所なく、心に所行なく、心地若し空ならば慧日自ら現じ、空開いて日の出づるが如くに相似んと、卍山廣錄には、只管打座之れを眞修と云ひ、身心脱落之れを眞證と謂ふとあり、又南嶽禪師の甄鏡問答の如きは極端に作佛を排せり、然れども禪家の禪が滅智に非ざること、は、禪修行方便經に云へる如く、禪にして智にあらざれば以て其寂を究むることなく、智にして禪にあらざれば以て其照を深ふることなし、則ち禪智の要照寂の謂を相濟ふなり、照寂を離れず、寂照を離れず、感すれば俱に遊き、應すれば同じく趣く、功、玄用に在て交々萬法を養ふと。

要するに小乗禪の消極主義は不可なり、大乘の作佛禪に捉はるゝべからず、一は斷見、他は常見にして、共に偏見に墮し、執着の臭あり、我が禪は非思慮底の打座尤も佳なり、左れど又方便經の説開の如く、照と寂との交渉上公案研究も妙なり、此の兩者雙修を妨げざると同時に、又片修も不可なるに非ず、其取捨の如きは結局其人の性能機根如何に在るなり。

第三節 無師禪と有師禪

釋尊は無師獨悟せり、大機は固より師を要せず、芙蓉道楷禪師、投子義青和尚に參じて問て曰く、佛祖の言句は家常茶飯の如し、之を離れて別に爲人の處ありや無しや、青曰く、寰中は天子の勅、還つて堯舜の力を假るや否や、此の青の答意は、佛祖の言句は佛祖の言句にして自己のものに非ず、當今天子の令は、昔日堯舜の權威を假るものに非ずして、直ちに自己の絶對權威を以て萬民に莅むものなり、左れば吾々は今日たとひ釋迦出世し、達磨再來すとも、敢て他の力を假らず、唯自ら肯ひ、自ら證して始めて得べしとなり。

圓悟禪師曰く、禪は意想に非ず、意想を以て禪に參すれば則ち道に乖き、功勳を絶す、功勳を以て道を學べば則ち失す、直ちに須らく意想を絶却すべし、什麼を呼んでか禪と作す、脚跟下廓爾、無禪の禪之を眞禪と謂ふと。

永嘉大師曰く、行も也た禪、坐も也た禪、語默動靜體安然と。

道元禪師曰く、坐禪は習禪にあらず、唯是れ安樂の法門なり、豈座臥に拘らんや。

普覺禪師曰く、有る時は一莖草を拈じて丈六の金身と作し、有る時は丈六の金身を將て却つて一莖草となし、種々に變化して一切法を成就す……是れ如來禪ならず

是れ祖師禪ならず、是れ心性禪ならず、是れ默照禪ならず、是れ捧喝禪ならず、是れ寂滅禪ならず、是れ過頭禪ならず、是れ教外別傳底の禪ならず、是れ五家宗派禪ならず、是れ妙喜老漢杜撰底の禪ならず。

以上の如き言句に就て考察する時は、禪の修行には敢て師を要せざるが如きも、又一方より見る時は、獨學は頗る危険なる點あり、有師の方安全にして捷徑なる便あり、左れど師其人を得ざれば、又大に弊あり、道元禪師の學道要心に曰く、

古人云はく、發心正しからざれば萬行空しく施すと、誠なる哉、此の言、行道は道師の正と邪とに依る可きもの歟、機は良材の如く、師は工匠に似たり、縦ひ良材爲りと雖も、良工を得ざれば綺麗未だ彰はれず、曲木と雖も好手に遇はば、妙巧忽ち現はる、師の正邪に隨つて悟の眞僞あること之れを以て曉るべし。

と、無師の尤も恐るべきは、増上慢を豫防し、若しくば之を打却するものなきこと之れなり、自分免許にて天晴れ大悟徹底せりと思惟するも、其實殆んど價なきものあり、現代の人士には無師獨悟の機少なきと同時に、又師家たるべき人もなし、是れ禪が宗教の上乗として、又人生上一日も缺ぐべからざるものなるに關はらず、萎靡振はず、時代

之を要求するも、真正の禪風發揚せざる所以なりとす。

第二章 參禪の簡擇

第一節 一念發起

禪は翫弄物に非ず、又常途の嗜好品にも非ず、更に贅澤物にも非ず、禪は眞の生命なり、食は廢すべし、而かも禪は學ばざるべからず、蓋し禪悟を得ざれば意義ある生活を爲す能はずして、醉生夢死に終るべきを以てなり、左れば禪は好奇的に修すべきものには非ず、又翫弄的に思惟すべきものに非ず、斯の如きは縱令舜を學ぶは舜の類なりとの一理ありとするも、結局禪の神聖を汚瀆し、且つ自己も亦却つて終生を誤るに至るべきなり。

參禪の正道は一念發起を要す、一念發起の動機は、第一を懷疑とす、宇宙の真相、人生の歸趣に對し、大なる疑問を有し、摯實に之を解決せんとするものは、最好の禪機なり、第二は人生の競争場裡に失敗して、逆境に沈淪し、悲痛煩悶の極、一念發起して此の苦境を脱却せんと希望を以て入道すべし、此等を參禪の正機と爲す、兩手を打ちて商

賣を爲し得る間は、禪の必要もなく、亦此等の徒が參禪するも何等得る所あるべき理なし、手も打てず二進三進も歩けなくなりたる時、始めて隻手の聲にても聞かんとする眞面目なる考も起り來るものなり、要するに入道には必ずや懷疑觀、若しくは無常觀、罪惡觀を要す、懷疑は理性の人に多く、無常觀、罪惡觀は感情的のものに多し、釋尊以來佛教の祖師高僧は悉く、此の兩門より入りしものにして、又其多くは懷疑無常の兩觀を兼ねたるものなり、道元禪師の言に、無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身既に私に非ず、命は光陰の移されて暫くも停め難し、紅顏いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし、熟々觀する所に往事の再び逢ふべからざる多しと、又曰く、誠に夫れ無常を觀する時、吾我の心生せず、名利の念起らず、時光の太だ速かなるを恐怖す、所以に行道は頭燃を救ふが如くし、身命の牢からざるを願ふ、所以に精進は翹足に慣ふ、縦ひ緊那迦陵讚歎の音聲を聞くも、夕の風耳を拂ひ、縦ひ毛嬙西施美妙の容顔を見るも、朝の露眼を遮る、已に聲色の繫縛を離るれば自ら道心の理致に合はん歟と、此の他苟くも善智識と云はるゝ者は、多く懷疑より入り、悟道して後懷疑の誤なることを表白せざるものなし、彼の大應禪師の、それ生死を出づる道は佛祖の示

す所なりと雖も、其源を尋ぬるに、心を明らむるに過ぎたるはなし、然るを人皆心即ち佛なるを知らず、外に佛を覓め、徒に疲勞して終に真理に稱ふ事なし、譬へば南に行ける親を知らず、其子北に尋ねて行くが故に、行くに随つて彌親に遠かるが如しと云へるは、懷疑及迷悟の意義を極めて明確に説破したるものにして、懷疑煩悶の極遂に一念發起して心佛を悟るべきものたるなり。

第二節 一切放下

禪門に入るには、先づ第一に一切の先入主たる思想を全部放棄せざるべからず、即ち劣等なる信念の如き、又は小理屈や、讀書力等の如き、既有の昏亂複雑せる思慮分別は潔よく之を打捨て、赤兒の心に歸るべきなり、倉庫にて種種々雑多の古道具を多く積みあれば、新たに寶物を納めんとするも餘地なきが如く、神聖の寶藏と爲さんとするには、先づ先入の雜物を搬出して、奇麗に淨除せざるべからざるは一見明らかなる所なり、道元禪師曰く、或る一類は己見を先として、經卷を披いて一兩語を記持して以て佛法となす、のち明師宗匠に參じて法を聞くの時、若し己身見に同じければ是となし、若し舊意に合はざれば非となす、邪を捨つるの法を知らず、豈に正に歸するの道

に登らんや、たとへ塵沙劫も尙ほ迷者たらん、尤も哀むべし、是を悲しまざらんやと、是れ實に先入主の我見僻見者に對する大鐵槌にして、我見ある者は到底道に入る能はざるものなり。

次は生死の問題を念頭より放下すべき事あり、人生一切の問題は悉く死の問題に歸結すべきは、既に人生觀篇に於て述べしが如く、如何なる人にも此の問題の爲め苦しまざるものなく、又他の一切の思考智見は之を放棄すべきも、生死の問題は如何にしても人類の念頭より之を取り去り得るものに非ず、否、生死の念慮を有するが故に、始めて生物たり、人間たることを得るものにして、人生より生死の念を呵遣すれば、人生もなく生もなきに至るものなり、然らば生死念頭の放下は全然不可能なるべきや、否、生死に對する苦悶痛心と、此の苦悶より惹起せられたる一切の煩累を放下して、生死は人生の常なりとして、生死を生死に任せ、敢て生死に累せられざる之れを生死放下と云ふ、道元禪師曰く、大聖は生死を心にまかす、生死を身にまかす、生死を道にまかす、生死を生死にまかすと、又曰く、生死去來、只だ是れ生死去來と。

斯く生死を生死に任かせて、洒々落落たる所に至れば最早生死に累せらるゝこと

なく既に生死に累せられず、生死念頭を離るゝ底のものには、他に何等の煩悶あるべき理なし、眞淨禪師の、日往き月來りて大盡小盡、光陰既に去りて生死漸く近く、大衆は總て是れ祖師門下の客、須らく生死の相關はらざることを知るべしと、上堂の偈に云へるが如き、又楠正成の生死交謝の時如何との間に對して、明極禪師の兩頭切斷して一劍天に倚て寒しと答へられたるが如き、皆是れ生死一切を放下して、生死以外の天地に活步せるものなり。

第三節 捨身拋命

禪は娛樂に非ず、兩刃相交はり、劍戟相接する以上の危機一髮懸命の場合なり、故に輕々看過すべからず、二祖の斷臂以て其誠實熱烈を觀るべく、又諸祖が幾十年の打坐、幾百の喝棒に甘んじて猶工夫を積むが如き、其努力堅忍以て倣ふべきなり、法燈法語に曰く、男女に依らず、貴賤を選ばず、只身を捨て、この大事を勤むべき志だにあらば、悟を得ることは掌を返すが如くなるべし、悟り難き事を歎くべからずと。

又道元禪師の隨聞記に曰く、機に隨ひ根に順ふべしと雖も、今祖席に相傳して専らする所は坐禪なり、此の行能く衆機を兼ね、上中下根ひとしく修し得べき法なり、我れ

大宋天童先師の會下にして、此道理を聞て後、晝夜定坐して極熱極寒には發病しつべしとて諸僧しばらく放下しき、我れ其とき自ら思はく設ひ發病して死すべくとも、猶ほ只是を修すべし、病無うして修せず、此の身をいたはり用ひて何の用ぞ、病して死せば本意なり、大宋國の善智識の下にて修し、死に死してよき僧にさばくられたらんは先づ勝縁なりと、又曰く、

大慧禪師あるとき尻に腫物出ぬれば、醫師此れを見て大事の物なりといふ、慧の云く大事の物ならば死ぬべきや、否や、醫師云はくほとんどあやふかるべし、慧の云はく若し死ぬべくんば彌坐禪すべしと云つて、猶強いて坐しければ、其腫物うみつぶれて別の事なかりき、古人の心かくの如し、病をうけては彌坐禪せしなり、今の人病なうして坐禪ゆるくすべからず、又曰く、

或人の云く我は病者なり、非器なり、學道にはたへず法門の最要を聞いて獨住隱居して身をやしない、病をたすけて一生を終へんと思ふと、これ太だ非なり、先聖必ずしも金骨にあらず、古人豈咸く皆上器ならんや、滅後を思へばいくばくならず、在世を考ふるに人々皆優なるにあらず、善人もあり、惡人もあり、比丘衆の中に不可思議の惡行

なるもあり、最下品の器量もあり、しかあれども卑下し病めりなど稱して道心をおこさず、非器なりと云つて學道せざるはなし、今生に若し學道修行せずんば何れの生にか器量の人となり、無病の者と成つて學道せんや、只身命を顧みず、發心修行するこそ學道の最要なれと、此れ以上最早附加するの要なし、鼠入、錢筒、伎既窮底の大死一番之れ修禪の秘訣なり。

第三章 階位漸修

第一節 正傳三昧

六祖慧能禪師曰く、一切善惡の境界に於て心念起らざるを名づけて坐と爲す、内自性の不動を見るを名づけて禪と爲すと之れを佛々相承、祖々正傳の三昧王三昧と名づけ、禪家坐禪の根本義と爲す、又指月禪師曰く、今未解の人の爲めに加跏坐の急を語らむか、謂はく其脚を加跏し、其掌を仰ぎ重ね、四肢格定して四塞の固きが如くし、耳肩鼻臍正しく對し、頭腹差へず躬まらず、仰がす側たす傾かざれば前後左右不正の形あることなく、而かも自ら端直正明溫和寂靜ならしむ、其れ猶ほ山河の突高にして陽位

は安く陰位は靜にして水火射はざるが如し、眼の正しく開くは昏沈せず、怒張せず、以て中和を得たり、口閉ちて寂止默密なるは天地萬物の大情なり、鼻息微かに通じ暴ならず塞ならず、其の度を守つて喘がす溢らざれば身安く、思はず量らざれば心胖なり、是れ即ち天地の大度なり、州土水火の安布する所吾れ乗つて身と爲す、斯く即ち吾が一天地なり、吾が天地と彼と一にして二にする所無しと、左れば坐禪の根本義は必ずしも座所の相に拘はるに非ず、一切事一切處悉く坐禪の面目なりと云ふべし、然れども如法に結跏趺坐するは、眞に是れ正傳三昧王三昧なり。

今坐禪の方式に就て近重博士の所説を抄録せんに、

- 1、足を組むこと、最も安定なる平衡状態にして定に入り易き事。
- 2、脊梁骨を直立せしむること、最も長きに耐ふる安坐法なる事。
- 3、手を重ねること、衝動的運動を防止する事。
- 4、下腹に力を入ること、力を丹田に籠むるは反動力を貯ふる所以にして、頭腦の充血に對する反動力、血行旺盛元氣充實する事、腹にて考ゆるは思考術の最上乘なる事。

又坐禪により究極到著すべき體格に就ては、下の如く説けり。

- 1、身體の抵抗力を増進すること、所謂安住不動、如須彌山、上下二力相平均して其人の平靜を維持せしむる事、危機一髪の間、に自然的威力を勃發し、又膽氣壓人に至る事。
- 2、健康を助長すること、能く諸病を治むる事。
- 3、氣息調整となること、肺臟の運動極めて遲緩と爲り、八萬四千の毛竅は都て乃公が呼吸の門戸となる事。

又禪定は冬蟄の状態に比すべく、坐禪の結果非常の潜勢力を得て、殆んど不可思議の妙用を活現し得るに至るべきものと爲せり。

更に又坐禪に關する各種の注意に就ては、大要下の如し。

場所の注意

- 1、靜閑、清潔にして冬暖、夏涼の地を撰び、極寒極熱を嫌ふ。
- 2、空氣清爽にして極明と極暗とは不可なり。
- 3、誘惑物の多き場所、其他變災起り易き所を避くべし。
- 4、勢家權門、遊人等の出入せざる場所を撰ぶ事。

- 5、展望の甚た豊かなる所を避くべし。

精神上的の注意

- 1、一切の分別判斷を停め、又分別判斷を停めんとするの念をも斷つべし。
- 2、求法、得悟、作佛の念を起す勿れ。
- 3、一切の執着を離れ、無我の直觀界に入り、法爾の大慈悲心に住すべし。
- 4、精神散亂せば、心を臍下丹田若くば鼻端に置くべし、又精神昏沈せば、心を髮際又は眉間に置くべし。
- 5、小疾の際には心を兩趺上に置くも妙なり。

身體の注意

- 1、飲食を節し、過不及なきを度と爲し、消化し易き蔬菜物中の滋養分に富めるものを主として用ゆべし。
- 2、衣服は清潔にして寒暖宜しきに適すべし、又寬急度を保たしむべし。
- 3、睡眠は過不足なきを要す、常に適度の休養を取るべし、又食後直ちに坐定に入るべからず。

4、皮膚は常に清淨にして垢膩を着くべからず、爪髮の如き推して知るべし。
5、一切の技樂、藝術等を嗜むべからず。

斯くの如く其始めは苦痛を忍び、方式に従ひ漸次修行を積む時は、後には行住坐臥悉く三昧の真面目に相應して、松風竹雨亦禪の提唱、任運舉體總て之れ本地の風光を發揮し來るに至り、唯是れ安樂の法門、語默動靜體安然たる境界に到達すべきものなりとす。

第二節 公案逐隨

前にも述べたる如く、公案逐隨は漸悟の梯子禪なり、然れども今日の參禪は、却つて之を不可とせず、師家若し其人を得んか、是れ尤も確實安全の方法なり、抑、公案の研鑽には、普通、法身、機關、言詮、難透の四種類あり、今其大意を左に略述すべし。

第一、法身、此の公案は入禪の關門にして、吾人が有する總ての考慮分別等を奪ひ盡して、之れを無一物の境界に陷擠するを目的と爲すものにして、趙州の無字、白隱の隻手の聲等は、有名なるものなり、元來法身とは一切の言說名色を離れたる無所得の境界故、斯くは命名せるものなり、而して此等の公案に對し、哲學的の答案は如何様にも、

提供し得べきも、禪家にては一切之を許さず、例へば宇宙の眞際は如何との問題に對し、眞如なりとか、實在なりとか答へんか、直ちに眞如を出せと迫り、理論にては如何にしても通過する能はず、要するに大死一番窮極の窮地より一躍して脱出し去らざるべからず、所謂鼠錢筒に入つて既に窮す、窮餘一切を放下して一躍する底の妙機に至らざるべからず。

第二、機關、此は前の法身の公案にて、漸く無我の境に近付きたるものを一層酷くし鍛鍊して、無我境裡に活動變化を發現せしめんとするものなり、例へば海中の眞珠を手を濡らさずして取るべしとか、坐して海上を疾走せる船を止むべしとか云ふ如き類にして、此の點は頗る用心せざれば魔悟に墮する恐あるものなり。

第三、言詮、此は法身機關を通過せる上、自由自在の運動を逞ふし、其妙趣を感得する上は、其理義を攻究する爲め、此の公案を用ゆるものにして、例へば絶對は時間空間を超越するものとせば、それを言說以上即ち哲學等の説明以上に實證せしむる方法なり。
第四、難透、此は禪機の漸次圓熟して、一機一境悉く禪の妙旨に協ふの域に達したる時、授くるものにして、究竟の境界、絶極の難案なれば、難透とは云ひしもの、白隱禪師の

七難透の如きは有名なるものなり、無にして無に墮せず、有にして有に墮せず、無中の有、有中の無、有無双照、双泯、端倪し得べからざる所、是れ禪の極致なれば、此の境界に拉し來らんとするは難透の目的なりとす。

以上四種類の公案は、公案そのもの、性質よりせる分別と云はんよりは、公案を授くる時の目的に依れる分類と云ふべく、故に法身の公案にても辛辣なる師家の手に依りて翻弄せらるゝ時は、其儘機關と爲り難透と爲るべきものにして、如何なる程度まで鍛鍊すべきか、如何なる方面に拉出せしめんかは、一に師家の方寸に存し、師家たるものは、資家の機を察して、巧みに之を打敲掖濟すべきものなり、但し今日にては公案の種類も大抵それ〴〵区分せられ、師資共に千遍一律の定り文句を弄ぶに過ぎずして、公案禪は眞の梯子禪と爲り、教相禪と退化し了れるなり。

第三節 三學具足

公案に依て智を究め、坐禪に依つて定に入る、定慧の二學既に全たし、然れども戒は未だ之を了せず、斯くては鼎足其一を缺き、佛道圓滿せずして墮在の因既に胎孕す、由來大乘佛徒は頗る戒を輕視し、其甚しきに至つては僧侶にして在俗よりも放逸なる

ものあり、之れ教主釋尊の本旨に背き、佛教起因の根底を無視する獅子身中の蟲と謂ふべきなり。

吾人は因より消極的、他律的の甚だしき戒律を主張するものに非ず、又小乗の如き煩瑣なる行儀を勵行すべしと謂ふにも非ず、只戒を重せざれば定亂れ、智明らかならざるを恐るゝに在り、而して又大乗戒は自律主義に依り、心法戒體の動機説なれば、理論としては極めて高尚なるも、戒律の本領並に其實績よりすれば、却つて結果論たる小乗戒の色法戒體を勝れりとす、大乘戒は大機若しくは既に修養の熟達せるものに對して應用すべきものにして、初學者及び劣機の者には、寧ろ他律的に強制して、自然に慣習と爲し、第二の天性を造り、修熟の極漸次に自律主義動機のと爲るに至らしむべきなり、古人も定慧全たしと雖も、戒なければ之れ盜人に正宗を持たしむるに同じと云へり。

次に戒の修熟には、常に二種の後援を要す、其一是懺悔なり、如何なる賢哲と雖も過失なきに非ず、又己れに省みて疾しき所なきものあらず、懺悔は道心を策勵する唯一の師斧にして、其功德の如きは諸經論に説き盡して餘蘊なく、道元禪師は、此の懺悔の

一句の中に法界一切の諸法を置いて解脱せざるなし、滅罪を待たずと雖も、此の懺悔の中に罪業あることなし……實を説くも妄に對せず、妄を説くも實に對せず、遠近に非ざるを直指の懺悔と云ふ、染汚なきを大圓鏡の懺悔と云ひ、妄なきを實相の懺悔と名くと云ひ、僧あり雲門禪師に問ふ、父を殺し母を殺せば佛前に向て懺悔す、佛を殺し祖を殺す時、甚麼に向て懺悔せん、雲門曰く露と、此等は理懺悔なるも、道元禪師の、誠心を専らにして佛前に懺悔すべし、慙麼するときは前佛懺悔の功德我を救つて清淨ならしむと云へる如き事の懺悔も亦緊要なり。

其二は慈悲心之れなり、吾人は一切衆生と回互不回互及回互不回互の回互と云へる主伴の關係を以て、共同生存を爲せるものなれば、同體大悲の觀念を以て、利他の行動を怠るべからず、經にも佛心とは大慈悲心之れなりと云ひ、智覺禪師は、慈を行すれば十一の種利あり、佛、偈を説て云く、仁慈を履行し、博愛衆を濟ふに十一譽あり、福常に身に隨ひ、心も安く覺も安し、惡夢を見ず、天讓り、人愛し、毒せず、兵はず、水火喪はず、在所に利を得、死して梵天に居る、是を十一と爲すと云へり、同體大悲の念あれば、取捨愛憎の私を制し、自己をも輕せず、他をも侮らず、敬虔同情の心強く、和氣仁風四邊を薫するものなり。

ものなり。

慙愧の心あれば懺悔あり、懺悔あれば戒全たく、慈心あれば徳進む、慙愧なく、戒なく、慈心なければ、如何に明智の者と雖も、極めて殺風景にして、殘忍酷薄、人智毒蛇との合、成物たるを免かれず、菩薩の墮獄とは此等の謂なり。

次に又既に修養の充分に熟せしものは、固より瑣細なる戒條等に齷齪拘泥すべきに非ず、只一定の主義を確立して、實際の生活上に之を活用し、彼は禁酒家にて打ち通せりとか、彼は眞の慈善家なりとか、彼は恐ろしき嚴格家なりとか、彼は一切無頓着主義なりとか、彼は極めて敬虔家なりとか、彼は二食主義にて押し通せりとか、彼は徒歩せらるゝに至る如く、實生活上に一定の特徴を發揮するも亦妙なり、固より禪は適も無く莫も無く變通自在を要とするものなれど、此の實生活上の特徴は決して變通自在と矛盾するものには非ず、變に處しては變通自在、一定の生活には一定の主義、彼此圓融を碍して却つて妙趣を覺ゆるものなり。

第四章 直入頓悟

第一節 頓悟の能否

性得佛性即ち先天論、修得佛性即ち後先論との爭論は、内外共に古來より相争へり、先天論は議論として固より徹底的なり、然れども修得佛性の後天論は事實なり、璞中には玉あるも、璞は直ちに明徹玲瓏の玉にはあらず、璞を玉と爲すには須らく充分の琢磨を要す、左れば漸進主義、梯子禪は事實に適せり、頓悟は理に於て可能なるも、實際としては殆んど空想に近し、然らば彼の北漸は勝りて南頓は虚妄なるべきか、否、直入頓悟には又別の意趣あり、乞ふ下り去つて之を辨せん。

先づ頓悟の實例に就て之を検せんに、何等方式の修行をも爲さず、又師家に參するにもあらず、何等かの動機に依り突然大悟せるものあり、又多少の工夫修養をば爲し、且つ師家はありしも、北漸主義、公案主義の方式に依つて修研せしにはあらず、然るを一時突然師家の一喝又は一語等に依りて轄然大悟することあり、諸祖は概して此の亞流なり、又或は最初の着眼點を異にするより頓悟の形式を現はし來ることあり、例

へば身はこれ菩提樹と觀すべきを、打逆して菩提もと樹に非ずと觀じたる爲め、早くも本來無一物の本地に到着し得たるが如き之れなり。

要するに其形式よりすれば、西天の二十八祖も、支那の諸祖も多くは之れ頓悟なり、然れども又翻つて其内容を考査する時は、頓悟に至る中間は漸進の過程ありて、縱令方式に依らず、師家に就かずとも、自然的修禪の意義を蓄積しつゝあるは、争ふべからざる事實なり、靈雲の桃花を見て突然大悟し、香嚴は擊竹の音に依り頓悟したるが如きは、形式は純然たる頓悟直入なり、左れど其茲に至りしまでの道程には、四圍の事情其他幾多の刺戟ありしや疑なし、左れど北漸に對する南頓は大に意義を有し、其意義に於ける直入頓悟は可能なりと斷じ得べし、即ち第一着眼點を異にして、直ちに本營に闖入する事、之に反して漸進主義は先づ矢軍より始むるが如きものなり、第二に大機の者は漸進の方式を要せず、頓悟の形式に依りて直入し得る事、第三に機根の如何に關せず、參禪の動機如何即ち大疑を有せるが如き、又は大悲觀者なるが如き者は、却つて直入頓悟し得る事。

以上の意味に於て直入頓悟は可能なり、要するに漸進は正軍、頓悟は奇軍、甲は地歩

戰、乙は逆襲戰、漸進は危險少なくして確實なるも、機に依つては却つて倦怠を來たす恐あり、斯の如き者は固より直入頓悟に依るを便なりとす。

第二節 頓悟と宿因

頓悟する者には必ずそれに相應せる宿因あるものなり、宿因とは三世の因果よりする前世の因、即ち先天的に英明の性能を有するもの、所謂天才のものもあるべく、更に又他の先天性即ち父祖の人格性能より來りし遺傳もあるべく、次には後天的なる教育、家庭の如何、其時代の風潮、周圍せる各社會の情勢、其他氣候風土の影響等もあるべし、此等を總括して宿因と云ふ。

門前の小僧習はぬ經を讀み、商人の子供は概して錢勘定に鋭く、農家の小兒は自ら下種の期を知り、武士の子は戯れに腹切る真似を爲す如く、自然の習慣には恐るべき威力あり、左れば人は如何に賢明にても、一切に通達するものに非ずして、各々一方面に天才を有するものなり、例へば軍人的天才あり、政治家的天才あり、學者としての天才あり、發明家としての天才あり、技術的天才あり、宗教的天才あり、學者的天才必ずしも宗教的政治的天才に非ず、一方には非常に鋭敏通徹なるも、他方には存外暗昧なる

もの多し、此と齊しく宗教的天才中にも亦種々の分類あり、他力教的天才あり、禪的天才あり、加持祈禱的天才あり、布教的天才あり、又均しく禪的天才中にも打座的天才あり、公案的天才あり、漸進を喜ぶものあり、直入を好むものあり、此等は孰れも宿因の然らしむる所にして、爾後の人爲を以て容易に變更し能はざるものなり、以て見るに直入頓悟は宿因の如何に依つて能否をトすべきものにして、宿因即ち天才ある者は頓悟と亦可能なりと斷ずるも不可なきなり。

第三節 大疑と大悟

大疑の下大悟あり、彼の藤村操の巖頭の感なるもの彼の本心より出でたりとせば彼は稍々大なる懷疑家にして、殆んど禪機に近きものなり、彼れにして今暫く生を保ち、今一息の懷疑煩悶を積まば、忽ち一轉して禪機に接着し、大悟の光明に接し得べかりしなり、只彼の懷疑は其年齢と相應せず、即ち彼の年齢にして今二三を加へ居りしならんには、死を決する前に今一工夫ありしなるべし。

惡に強きは善にも強きとの語は、之を下の如く應用し得べし、即ち初めより禪風を慕ひ、禪門に育ち、若しくは他の宗教に嫌焉たるより疾くも參禪しつゝあるもの、所謂

生へ抜きの禪徒よりは、却つて他力教より轉せしもの、或は基督教の有神説に懷疑を發して來り投せしもの、或は全然無宗教者宗教嫌ひ、特に佛教嫌ひ、更に禪を罵りし者等が、何等かの動機にて突然入禪せしが如き輩の方、却つて直入頓悟し得ること多し、要するに禪は最後の宗教なり、他力教にて甘ずる者は、未だ禪機に非ず、有神教にて信仰を疑しつゝあるものには、未だ禪を要せず、加持祈禱に熱中し居れるものには、未だ禪を示すの期に非ず、甲を疑ひ、乙を嘲り、丙を笑ひ、求めんと欲して求むる所なき懷疑者、是れ即ち禪家の正客にして、此等は禪の他に之を癒すべきの道なし、即ち禪は最局の失望者、最大の懷疑者、絶大の煩悶者、最上の悲觀者の投歸すべき宗教にして、此等を打成して白玉と爲すは禪の本分なり、然れども禪は大小勝劣を問はず、男女智愚の別なく、入り得ざるには非らず、然れども此等は常途の顧客にして、敢て珍客とするには價せず、珍客は飽迄大疑者なると同時に、此れ即ち頓悟者なりとす。

第五章 悟否の驗證

第一節 自己を實生活上より省よ

自己は既に大悟せりとするは、最大一の危険なり、又師家の允許を得たりとするも、其危険の程度は五十歩百歩にして、第一に師家そのものが危険物なるやも測り難きなり、左れば覺悟の眞否を驗證せんとするには、先づ第一に自己を實際の生活上より反省せざるべからず、即ち自己の存在が實生活上に如何なる意義を有するか、換言すれば自己の存在は有効なるか、將又醉生夢死なるかを検査すべきなり。

若し自己の存在が何等其社會にも後世にも、効献するに足るべき價值なしとせば、之れ僞悟なり、與へて評するも死悟たるを免かれず、斯くては悟の眞否は暫く之を措くも、此れ全く醉生夢死の食糞鬼にして、最早生存の要なきものなり、今存在の價值に關する大綱を左に條記せんに、

- 一、自己の存在が家庭又は寺門に於て、如何なる効果を生じつゝあるか。
- 二、自己の存在が郷黨親族朋友間、又は一宗一派の間に於て、幾何の必要を認められつゝあるか。
- 三、自己の行動は國家社會の風教上如何なる影響を及ぼしつゝあるか。
- 四、自己は人道に對して如何なる活動、若しくは活動の準備を爲しつゝあるか。

五、自己に高風清節一世を感化し、若しくは後世を風靡するの要素を有し、又は現に實現しつゝあるか。

斯くの如く日々反省する時は、自己が存在の價值を分明ならしむると同時に、其無價值若しくは價值の少なきをば價值あらしめ、又向上せしむることを得るものにして、此れ又一方には悟後の修行たるものなり。

猶茲に一言すべきは、國家社會に對する効献とは、其社會國家の穩健なる場合を指せるものにして、若し社會が不健全にして缺陷ある場合ならんには、之に逆抗して更新を企つるも決つして不可なく、之れ即ち眞の効献なり、此等の實際は時と所とに依つて、審かに考量し、以て臨機の處斷に出つべきは勿論なりとす。

第二節 自己を道義的に省よ

宗教は國家及び道德に超越す、殊に禪は道德を以て之を律すべき狹隘のもの、人爲的のものには非ず、然れども人として社會に處する上は、其心身業動の結果をば、之を道德的批判に任するを不可とせず、況んや禪には禪的道德あり、之れに依つて自家を反省するは、亦喫緊の事たらずんば、今先づ禪家道德の大綱を瞥見せんに、其體

悔三寶歸依、諸惡莫作の四句偈、三聖淨戒、十重禁戒は今更云ふの要なし、其他に就て肝要の文二三を擧げんに、

道元禪師曰く、菩提心を發すといふは、己れ未だ度せざる前に、一切衆生を度せんと發願し營むなり。

又曰く、其形陋しといふとも、此の心を發せば、已に一切衆生の導師なり、假ひ七歳の女流なりとも、即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女を論すること勿れ、此れ佛道極妙の法則なり。

又曰く、衆生を利益すといふは、四種の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同時、是れ即ち菩提の行願なり。

その布施といふは、貪らざるなり、我物にあらざれども布施を障へざる道理あり、その物の輕きを嫌はず、その功の實なるべきなり。

たゞ彼が報謝を貪らず、自ら力を煩つなり、舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり、治生産業固より布施に非ざることなし。

向ひて愛語を聞くは、面を喜ばしめ心を楽しくす、向はずして愛語を聞くは、肝に銘

じ魂に銘す、愛語能く廻天の力あることを學すべきなり。

愚人おもはくは利他を先とせば自らが利省れぬべしと、爾にはあらざるなり、利行は一法なり、普く自他を利するなり。

同事といふは不違なり、自にも不違なり、他にも不違なり、譬へば人間の如來は人間に同せるが如し、他をして自に同せしめて後に自をして他に同せしむる道理あるべし。

圓覺經に曰く、菩提は唯大悲を以て、方便して、即ち諸の世間に入り、未悟を開發し、種々の形相を示現し、逆順の境界、其れと同化して成佛せしむ。

此等の諸説と佛教の本旨及び禪の立場よりして、左の如き設問を提供し得べし。

一、汝は獨居の際思惟する所を省みて耻づる所なきや如何

二、殺佛殺祖は識見なり、歸依三寶は儀禮にして祖々の遺躅なり、汝は之を混同することなきや如何。

三、汝は大悟せり、而かも悟後の修行は更に肝心なり、汝が日夕の行動は本證妙修の意を得たるや如何。

四、汝は家庭若しくは寺門に於て、其務を整理し、其平和と幸榮とを支持し増進し得つつあるや如何、一家一寺の幸榮と平和とを能くせざる底の愚物、如何ぞ能く社會を云々するを得ん、風教に容喙するを得ん、家務寺務の整頓と平和と云ふも、必ず自ら細事に拘泥すべきには非ず、放任無爲の治は平和の至上なり、或は細事に干涉し、或は無責任の極を盡くし、一門風波絶間なきが如きことなきや如何。

五、汝は他の妻又は夫、或は男女に對して、染心汚念を恣にせしことなきや如何。

六、汝は羨貪、愛憎其他各種の境界に應じて、厭ふべき執着を恣にせしことなきや如何。

七、汝は風教上に悪影響を及ぼすべき行動を敢てせざりしや如何。

八、汝は菩提道に於て怠慢の念を生じ、又懺悔を怠りしことなきや如何。

九、汝は布施、愛語、利行、同時、其他の禁戒道法に對し、省みて耻づる所なきや如何。

十、汝は道徳的審判の上に於て、無罪たり、又生存の價値ありと證明し得るや如何。

第三節 眞俗一體の妙諦

眞俗一體の妙諦とは如何、先づ左に其綱目を列舉して以て一瞥に資せん。

- 一、内鑑冷然として外和氣霽々たるもの。
 - 二、向上と同時に向下するもの。
 - 三、内に本地の風光を楽しみ、外峻烈嚴格なるもの。
 - 四、内に殺佛殺祖の識見を博し、外敬佛崇祖の敬虔あるもの。
 - 五、自ら奉ずること淡泊にして、利他の行動に熱烈なるもの。
 - 六、有無二偏を斥け、一切の執着を離れ、而かも世相に順して悲喜に伴ふもの。
 - 七、悟蹤悟臭を絶ち、悟と無悟とに不離不即し無住的立脚するもの。
 - 八、國家道德、社會道德に捉はれずして、而かも之れと撞着せざるもの。
 - 九、窮に處して窮に通じ、貧に處して貧を楽しみ、逆境に在つて綽々たるもの。
 - 十、變に臨んでも自在、危に在つても自在、生死にも累せられず、冷靜落心なるもの。
- 更に又他の方面より考查する時は、下の如き條項を得べし、此は前節と多少重複する嫌あるも、叩いて之を盡すべし。
- 一、家庭に於て良主人公、良主婦たり得るもの、又寺門に於ては良庵主たり得べきもの。

- 二、親に對して良子弟、子に對しては嚴父慈母たり、夫に對して良妻、妻に對して良夫、從屬に對して良主人、資家に對して良師、師家に對して好資たり得るもの。
- 三、或時は志士と爲り、或時は忠臣と爲り、或時は烈婦と爲り得るもの。
- 四、或時は世と推稱して和光同塵、或は不健全なる國家社會と惡戰して、刀鏗も猶は辭せざるもの。
- 五、或時は面壁打坐枯木死灰の如く、或時は熱烈火の如く血涙を揮つて狂奔するもの。
- 六、自己の本分本職に對しては、徹頭徹尾忠實誠摯に努力するもの。
- 七、或時は能く財物を蓄へ、或時は能く之を散ずるもの。
- 八、或時は自ら愚にして樵夫の侮りにも甘んじ、或時は高臺稠座の中に王侯をも叱咤するもの。
- 九、或時は盜卒も之を憐み、或時は大義親をも斬るもの。
- 十、或時は古鏡の塵埃を拂ふが如く、或時は快刀亂麻を斷つが如く、或は萬事無心一釣竿、三公不換此江山底の貧富壽夭に二心せざる風趣あり、或時は毀譽褒貶を意

とせず、或時は自他共に批判し、發して必ず節に中るもの。

斯くの如く眞を離れずして俗に即し、俗を離れずして眞に即し、向上あつて向下の基を爲し、向下あつて益々向上を増進するもの、之れ即ち眞俗一體不離不即の妙諦にして、此の如き境界に體達せるもの、之を大悟者と云ひ、此の如き境界即ち之れ本地の風光なり。

第九編 禪と實生活

第一章 宗教的生活

第一節 實在の風光

宏智禪師曰く、

一段眞風見也、麼綿々化母理機梭、織成古錦含春象、無奈東君漏洩何。

萬象は造化の母が織り出せる一段の古錦にして、中に無邊の風月あり、不盡の山川あり、天真の妙境、實に言外の大文字に非ずや。

洪川和尚曰く、

一夜定中忽然として前後際斷絶妙の佳境に入り、恰も大死底の人の如し、一切物我あるを覺へず、只覺ゆ吾腔内の一氣十方世界に瀰漫して光耀無量須臾にして蘇息するもの、如し、視聽言動轄然として平日に異り、是に於て誠に天下の至義妙義を求むるに頭々上に明らかに、物々上に顯らかに、歡喜の餘手の舞ひ足の踏む所を知らずと。

宇宙の靈的大生命に接着して、實在の風光と歡樂するの境界眞に天國的生活に非ずや。

碧巖集の序に曰く、

諸佛未だ出世せざるに常轉法輪あり、山は築かずして高く、海は決せずして深し、已に出世に及びて終に本分を以て人に説示せざるなし、苦瓜は根に連りて苦く、甜瓜は蒂に徹して甜し、豈安排を假らんや、唯一等地に於て根源を識破せば物々全眞頭々玄極ならん、即ち見ん法は法位に住して世間の相は常住なり、更に禪道佛法の臭氣なしと。

築ざる山、決せざる海、直ちに之れ佛の説法、苦瓜の苦、甜瓜の甜、正に之れ實在の玄極、山河大地全露、法王身、古松談、般若、幽鳥弄、眞如、頭々物々大光明を放つもの眞に之れ實在の風光に非ずして何ぞや、沙石集に曰く、聖人は常の心なし、萬人の心を以て心とす、法身は定まれる身なし、萬物の身を以て身と爲すと、雲門衆に示して曰く、汝若し實に入處を得ずんば、三世の諸佛汝の脚跟下に在り、一代の藏經汝が舌頭上に在りと、紅花柳綠、見色明心、聞聲悟道、實に宇宙的神靈の風光は至らざる所なく、悟も亦是れ光明界

裡迷も亦是れ光明界裡、打着一番神韻漂渺として、矚目悉く之れ妙趣。

第二節 二偏を離る

思益經に曰く、諸佛の出世は衆生をして生死を出で涅槃に入らしめんが爲めにあらす、只生死と涅槃との二見を斷たしめん爲なり、大應國師曰く、

本來是の如し、更に迷ふこと無く悟る事なし、謂はれなく我は迷ひなりと思ひて、外に佛を求むるやうに思ふ心迷なり、外に別の法なし、心と佛と衆生と、三つの差別なし、祖師いふ即心即佛と、又心の外に佛なし、心を離れて佛を求むれば、地を掘て天を求むるが如し……明暮起きても居てもかやうに振舞ふものは何者ぞと能く見れば、見る物もなく、見らるゝ物も忘れはて、力竭き神疲れはてたる所を少し力を得たりと申すなり、此に至て覺へざるに我が本來の不生不死、埋めども埋れず、焼けども焼けず、喜も憂もあらざる所を知るなり、これこそ眞の佛、法身の如來と申すにて候、此に至て地獄もなく、極樂もなく、取る事もなく捨ることもなく、衆生も無し、取る事もなき故に僧は僧の行を爲し、俗は俗の業をなすべし、然れども作す所に更に執着せず、捨つる事も無き故に、本の如く皆作すべし、喜愁も人

と同じやうになれども、内心は次第に面白く涼しきなり、本心の何にも着せざる處を知る故なり。

道元禪師曰く、

萬法はこれ一心なり、一心は是れ萬法なり、山河大地は則ち是れ我心なり、我心は則ち是れ山河大地なり、又法界の心體は、是れ我心體なり、故に肇法師曰く、天地與我同様、萬物一體なり、春生じ夏長し秋黃冬落、これを離れぬれば智慧あれども分別の心にあらず、分別の心なくんば見聞覺知を嫌はず、唯分別の心を嫌ふなり、分別の心とは諸佛と衆生と各別に思ひ、地獄と淨土と各別に思ひ、心と法と各別に思ひ、人を疎にし我を親にし、吾は知なり、汝は不知なりと思ふ心なり、其外無盡なりと雖も、これには過ぎず、此れに心がなければ則ち心歷々として明ならざる處もなく、法として照らさざる所もなし、又靈々として留る所もなし、真に無心の地に到るべし、……見よ難寒うして木に登り、鴨寒うして水に入る。

有に著し、無に著し、生死に著し、涅槃に著し、迷に著し、悟に著し、真に著し、俗に著し、貴賤賢愚、貧富壽夭、病健、美醜、悉く心を煩はすの料と爲り、斷常一異の偏見に神を勞する

は、此れ世間相なり、此の兩端を離れて有無悲喜一切に捉はるゝことなく、無適無莫、悠悠々々として其處を得るもの之れ宗教的生活の現實なりとす。

第三節 無礙の淨心

大智度論には、心中に信の清淨なるあらば、是の人能く佛法に入ると云ひ、道元禪師は、およそ信現成のところは佛祖現成のところなりと云へり、黃檗禪師は七尺の大軀、日々七百拜を行ひつゝ、而かも佛に著て求めず、法に著て求めず、衆に著て求めず、常に禮することは是の如しと喝破せり、其崇高なる人格、敬虔なる態度、偉大なる識見、豈欣羨の至りならずや、又道元禪師の訓示に曰く、

およそ佛子の行道かならずまづ十方の三寶を敬禮したてまつり、十方の三寶を勸請したてまつりて、そのみまへに焼香散華してまさに諸行を修するなり、もし歸依三寶の儀これすなはち古先の勝躡なり、佛祖の古儀なり、未だかつておこなはざるはこれ外道の法なりとするべし、または天魔の法ならん、しるべし、佛々祖々の法はかならずそのはじめに歸依三寶の儀軌あり。

聖一國師は、一切衆生に自性あり、此の性もとより不生不滅なり、常住不變なり、故に

本有の自性と名く、三世諸佛も一切衆生も此の性を本地法身とす、此の法身の光明、周遍法界に充滿して、一切衆生の愚暗無明と回光返照すと説きて、信の對象と信の意義と示し、無疑の淨信が感應道交の消息を洩らせり。

芙蓉道階禪師の遺偈に曰く、吾れ年七十六、世緣今已に定まる、生きて天堂を愛せず、死して地獄を怕れず、手を撒し、身を横ふ、三界の外、騰々任運何ぞ拘束せむと、其識見、其確信、眞に天空海濶の趣あり、又道元禪師は報恩的信念に就て左の如く示されたり。

今の見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩なり、佛祖若し單傳せずんば、奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙報謝すべし、況んや正法眼藏無上大法の大恩、これを報謝せざらんや。

又曰く、

見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや、釋迦牟尼佛とは卽身是佛なり、卽身是佛とは誰と云ふぞと、審細に參究すべし、當に佛恩を報するにてあらん。

面山和尚曰く、

妙詮の海は深くして底の測られざるや、一滴の微に隨波逐浪す、立旨の山は高く

して頂を窮め難きや、寸塊の少に疊巘層峰す、苟も滴塊を識得する者は深高を恐ること莫し、深高を體解する者は滴塊何ぞ輕せん、大千經卷の塵裏に包裹して一四句偈の法界に展演する所以なり。

以上の諸句は以て禪家信念の對象と其意義とを諒解するに充分なる資料たるべし、斯くの如くにして信に信臭なく、又彼此衝突せず、ゴットも天理王も悉く禪門の鎔爐に溶けて簡釋する所なきと同時に、又皆之れその渣滓たるに過ぎざるべし、此を之れ無礙の淨信と云ひ、宗教的生活の第一義と稱せんか。

第二章 簡易生活

第一節 獸生と靈生

佛教は本來禁欲主義にして、乞食生活を其本領とす、然るに佛滅後愚僧僭上して遂に王侯の虚榮を學ぶに至り、特に我が國の佛教に其弊甚し、然れども禪家は比較的簡潔を尙ぶの風習あり、聊か以て與するに足る、由來金殿玉樓の裡、錦衣玉食、珍器奇物、四邊に備はり、妻妾僮僕家に充つ、斯の如き生活を醉生夢死と云ふ、其心は昏迷して羝羊

の如く、其爲す所は悉く迷中の是非、生きて自己に益なく、社會に害あり、美味飽食は生氣を害し、倦怠を生ず、脾胃困苦固より論なし、錦衣盛装は動作敏活を缺き、虚榮を喜び、諛辭を求む、珍奇眼を喜ばしめて心を盲し、左右人あり便あるが如くにして、其實監禁に異ならず、斯の如きは實に獸的生活なり。

禪家は粥を啜り、麥飯を食ひ、菜を嗜む、綿衣なれば活動するも破れず、黒色鼠色なれば容易に垢汚せず、物を斥けて恬淡、清掃して洒落、求めず貪らず、有に任せ、無に任せて、悠々塞滯せず、外物の爲めに犯されず、周邊の事情に累せられず、擧手投足法佛の三摩耶を現し、片言隻句六趣を警覺す、斯くの如きを靈的生活と云ふ。

桃水和尚平生乞食の境界に安んじて曰く、

如是生涯如是寛、弊衣破碗也、閑々飢餐湯飲只吾識、世上是非總不予。

吞空法師が行脚の時、自慎自戒の文に、

- 一、不惜身命を思定、今日切の境界、無常迅速、夢幻泡影忘るまじき事。
- 一、色慾、身慾、名聞慾を可離事、附憍慢心可慎事。
- 一、五戒勿論也、但飲酒妄語の二戒は事によるべし、他の爲め善き事には偽も可なる

べき事。

一、山賊追剽等に逢はば、裸にて渡すべし、若し殺害に及ばば、首をのべて待つべし、死て敵をとるまじき事。

一、衣食居は天道に任すべし、當季の外衣は可捨事。

一、船賃、木賃、茶代少しもねざるまじき事。

一、中途にて乞凶悲人に慈悲を加ふべし、且病人には所持の藥可與事。

一、文筆所望なきに書くまじき事、但し望む人あらば貴賤を問はず一言も否といふ

詞出すまじき事。

一、一足も馬駕に乗るまじき事、但し不及山上の道は折によるべし。

右の九個條神佛に誓ひ心戒を定むるものなり、若し病死する事あらば行脚の日記と此ヶ條を故郷へ送り給ふべし。

死して後かばねの事は左もあらばあれ

とりおきてには鳥狼

諸國旅宿御中

産國勢州射和村大淀氏三千風(判)

原坦山の癡隱室の銘に曰く、

居處無恒、出入不拘、以天地爲一廬、以萬物爲伴侶、安於所遇、適於所處。

陽國寶の壁書に曰く、

竹百竿あり、香一爐あり、書千卷あり、酒一壺あり、是の如くにして足れり。

寒山曰く、

我心似秋月、碧潭清皎素、無物堪比倫、教我如何說。

證道歌に曰く、

窮釋子口に貧と稱すれども、實は是れ身の貧にして道の貧にはあらず、貧ならば、則ち身常に褸褐を披するも、道あるときは心に無價の珍を藏す、無價の珍は用ひて盡くること爲し。

第二節 順逆變通

順境に在つて傲らす慢せず、逆境に在つて悲ます僞らず、貧に處して貧を樂み、富に處して富を樂み、窮に遇ふて驚かず憂へず、達にあつて誇らず侮らず、順逆變通窮達自在、適くとして可ならざるなく、發して節に中らざるものなきは、此れ宗教的生活を起

準として簡易生活に馴致せられたる自然の天資なり、圓覺經に曰く、

心情淨なるが故に一身清淨なり、一身清淨なるが故に一世界清淨なり、乃至虛空を盡し三世を圓裏して切に清淨にして動かす。

之れ豈淨心主義を以て、貧富窮達一切を淨化し終れるものに非ずや。

澤庵和尚の太阿記に曰く、

夫れ通達の人、刀を用ひずして人を殺し、刀を用ひて人を活かす、殺さんと要せば即ち殺し、活さんと要せば即ち活す、殺々三昧、活々三昧也、是非を見ずして而かも能く是非を見、分別を作さずして而かも能く分別を作す、水を踏むこと地の如く、地を踏むこと水の如し、若し此の自由を得ば、盡大地の人、他を奈何ともせず、悉く同侶を斷たむ。

活殺我に在り、宇宙亦掌上。

僧あり洞山に問ふ、寒暑到來如何か回避せん、洞山云はく、何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる、僧曰はく、如何なるが是れ無寒暑の所、洞山曰はく、寒の時は鬮梨を寒殺し、熱の時は鬮梨を熱殺すと。

寒には寒殺、熱には熱殺、心頭を滅却すれば火も亦清涼、我心を勞して外境に同せんとすれば、萬累千難續いて起る、畢竟堪ゆべきに非ず、外物を簡化して我心に降らしむるれば、一立萬治す、之れ豈簡易生活の極致に非ずや、斯くの如くにして一簡能く萬煩を治し、一易以て宇宙を化す、何もの至寶が能く之れに比せん。

第三節 恬淡と眞勇

近時禪を以て膽力養成の一機械の如く見做し居るものあり、之れ禪を汚かすの甚しきものなると同時に、又膽力養成の爲めに、禪を學ぶものと云ふが如き心得にては、膽力の養成は愚か、結局高慢狂と爲るの他なく、禪を學ばんとして禪の爲めに毒殺せられたるべきなり、元來膽力養成等云ふ小さき希望目的を抱いて禪を學ばんとするは、禪の何たるを解せざるものにして、參禪には一切の目的希望を放下し、あらゆる先入の思想を打遣し、生死念頭になきに至つて、初めて漸く其門に入り得べきものなり。禪道漸く熟すれば生死全たく念頭を離れ、何等の思慮の我を累はすものなく、恬として寒巖の如く、淡として枯木の如し、然れども本地の風光は裡に活躍し、宇宙の生氣は臍下に充つ、茲を以て來り犯するものあるときは、一喝能く之を斥け、一睨以て之を

殺すべし、心身共に不動地に住して、活氣は六合を覆ふ、豈一二の凶徒敵手を論せんや、活殺我に在り、機に應じ境に順じ變に臨んで、自由自在なる自然的發作あり、何ぞ膽力と謂はんや、又膽力を云々するの要なきなり。

學問を鼻に懸け、膽力を眼に現はし以て得々たる盲學小膽者流、豈以て眞の勇と生ける學とを語るべけんや、膽力養成を云々する如きものは、如何に上達すとも畢竟蠻勇血氣の勇に了り、一二者の敵たるに過ぎずして、有刀にして活し、無刀にして殺し、戦はずして先づ多くの敵を服するの禪機は到底望み得べきにあらず。

無想なれば宇宙の神靈と同化し、六合の神氣悉く我が有たり、恬淡なれば生氣内に蘊蓄して外に洩れず、豫め眼を振り腕を扼すれば、勇氣早く遁逸し、聲を怒らし、心を跳らしむれば、生氣空しく發し、斯くて殘る所は、武者人形と同じき屍骸のみ、平生寂然として神を養ひ、恬然として勇を制す、斯くの如くにして一たび手を擧ぐれば、神氣既に敵を壓す、要するに眞勇は恬淡に由つて養ふべく、恬淡は簡易生活の眞髓にして、簡易生活は禪的生活なり、生死念頭を離れて以て始めて其の簡易生活に入り得べきなり。宋亡ぶるの時元兵祖元禪師の室に入り、白刃を揮つて其首に擬す、祖元從容として

偈を説く。

乾坤無地卓孤筇、且喜人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風。

元兵呆れて去る、又快川國師、織田信長の爲めに焼殺せらる際、安禪は必ずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば火も亦涼と、泰然動かす笑つて焼かれたり。

第三章 努力的生活

第一節 忘我の活動

努力活動に盲動と眞動とあり、自我自利を中心とし、自己の名譽利益虚榮等の爲めに努力し活動するものは、之れ僞動なり、盲動なり、其結果は風教を害し、人心を危くす又或は國家社會人道の爲めに努力するものあり、此等は、大に嘉すべきも、未だ第一義の妙諦には非ず、眞の努力、眞の活動は忘我の努力に在り、生死を離れ、毀譽を忘れ、茫茫漠々、機に應じ境に順じて、法爾自然の活動を爲すもの、之れ即ち神靈の發動なり、宇宙的活動なり、斯の如き妙諦は禪機を體得せざれば能はざる所なり、雪竇和尚曰く、

一片虚疑絶謂情、人天從此見空生、蚌含玄兔深深意、曾與禪家作戰爭。

此は非思慮底の大妙智が活動の根底たるべきを暗示せるものなり、天童正覺和尚の頌古に曰く、

雲犀玩月燥含輝、木馬遊春駿不羈、眉底一双寒碧眼、看經那到透牛皮、明白心超曠劫、英雄刀破重圍、妙圓樞口轉靈機、寒山忘却來時路、拾得相將携手歸。

雲犀月下に遊ぶの光景は神々たり、木馬春に遊ぶは無念無想の境界にして、而かも自由なり、是れ超俗的の活動を意味す、眉底一双碧眼寒しは、氣骨凌々、以下は活動三昧即ち無念の活動、忘我の努力と其功德大精神が時間空間に超越するを示したるものなり。

道元禪師曰く、佛と成るにいと易き道なり、諸の惡を作らず、生死に著する所なく、一切衆生の爲めに憐みを深くして、上を敬ひ、下を愍み、萬を厭ふ所なく、欣ぶ所なくて、心に思ふことなく、憂ふことなく、これを佛と名づく、また外にたづぬること勿れ。

藥山和尚曰く、有心已に謝し、無心未だ様らず、今生の活命、清淨を上となす。

第二節 趣味ある生活

趣味ある生活、茲に趣味と云ふは瑣細なる嗜好、又は風流を云ふにあらず、自己の天

稟に適し、尤も趣味を有する職業を發見して、一心不亂之れに従事努力する者を趣味ある生活と云ふ、此れ即ち天職努力なり、天職努力は人生の本分にして、人として天職なきは如何なる賢者智者も悉く之れ遊民なり、無用の長物なり、又天職に非ざる即ち自己の性能に適せず、自己の好まざる所を他に強ひられ爲すものは、之れ器械なり、牛馬と撰ぶ所なきものなり、左れば斯の如き境遇に在るものは、速かに之を脱却して天職を求むべし、若し之を脱却し得ずんば寧ろ死するに若かざるなり、故に小僧にして佛家たるを嫌はゞ速かに寺を飛び出すべく、大工に趣味を有するものは大工たるべく、俳優に趣味を有するものは俳優たるべく、職業そのものには貴賤なく、悉く神聖なり、左れば決して他の毀譽褒貶に依つて左右せらるべからず、又既に天職を發見し得て、之れに従事する以上は一切他の批判及び餘業に心を移さず、専心努力すべし、斯の如き境界之れ即ち趣味ある生活、菩薩の行動にして、貴賤貧富の如き以て意を累はすに足らず、威武も屈せしむる能はず、金力も以て動かす能はざる底の意義ある人生を經過するものなり。

天職は神聖なり、決つして之を他の爲めに犯し汚さるべからず、即ち金力權力等の

爲めに弄せらるべからざるなり、天職を求むるは難きに非ず、而かも之を汚されざるは至難なり、世に天才的の學者はあるも、遂には曲學阿世と化し、宗教家自ら膝を屈して三昧線の師匠同様幫間的出教授を爲す、舉世滔々皆斯くの如し、古人は即ち如何、今人は教法を營業となし、古人は濟度の爲めにす、故に古人は多少の感化を與へ得しも、今人は教へて他を害し、法を以て世を亂るに至れり、大山侯垂簾の中に在りて、雪潭和尚の法話を聽かんとす、和尚曰く、

我が法には糟なし、漉して聞くに及ばずと、

般若多羅、國王の供養を受けて看經せず、王問て曰く何ぞ讀經せざるや、多羅曰く、貧道、入息陰界に居らず、出息衆緣に涉らず、常に如是經を轉ずること百千萬億卷なりと。

照覺辯禪師棲賢寺に住し、乞食の如き行装にて遊行す、混融なる人注意して自重せしむ、禪師即ち偈に示して曰く、

勿謂棲賢窮、身窮道不窮、草鞋猛以虎、拄杖活如龍、渴飲曹溪水、飢吞栗棘蓬、銅頭鐵頭、漠盡在我山中。

又曰く、

衆龍雨を致すに足らず、晝餅安ぞ飢に充つべき、褌子内實徳なくして外華巧を特む、猶ほ敗漏の船に盛に、丹藥を塗り、偶人をして之に駕りて陸地に安せしむるが如し、則ち信然として觀るべし矣、一旦江湖を涉り、風濤を犯さば、危からざるを得む乎。

慧忠國師唐の肅宗と問答す、帝曰く、如何なるか是れ十身調節、國師答て曰く、檀越毘爐の頂上を踏んで行け、帝曰く、寡人會せず、國師曰く、自己を清淨法身と認むること莫れと、是れ内に佛の頭上を踏むべき大見識を有せよ、他に十身調對の光明如來なし、併し自分は卑下して佛と思ふなど、兩様の訓戒なり、雪竇之を頌して曰く、

一國之師亦強名、南陽獨許振嘉聲、大唐扶得真天子、尊踏毘爐頂上行、鐵槌擊碎黃金骨、天地之間更何物、三千刹海夜沈々、不知誰入蒼龍窟。

道元禪師は鎌倉執權の名監豐祿を拒絕し、玄明が三千貫の寄附狀を携へ來りし時、陋いかな這の漢、一片の利心八識田中に墜つ、恰も油の麩に入るが如く、永劫にも撒すべからず、亦恐らくは辱を大法に貽さん。

とて、玄明の法衣を褻辱して下山せしめたり、又一休和尚と同じく勅賜の紫衣に關する事は何人も熟知する所なり。

第三節 自然の大法

仰いで天體を觀よ、日月星辰の東涌西沒、盈虛隱現、一日として息むなきは、古往既に然り、現時も亦然り、將來も亦然り、伏して地域を察せよ、四季の循環に伴ふて榮枯盛衰あり、一花一草の開落生滅、悉く之れ法爾の活動ならざるはなく、自然の努力ならざるはなし、彼等は動けども無心なり、而かも無心の中に自ら一定の秩序あり、因果あり、整然として亂れず、自ら宇宙的大目的の過程史を編成しつつあるなり。

吾人々類も亦萬有の一部屬にして、天地間の一物なり、左れば斯の如き自然の大法に遵ひて、法爾自爾の努力を爲すべきは、謂ふまでなき所なり、然るに人は智慮勝れたる爲め、一方には宇宙の過程に効献する所大なるものあるも、又他方には自分勝手の思慮分別を逞ふして、動もすれば此の自然の大法を無視し、又は殊に衝突せんとするものあり、斯くの如くにして漸く冥より冥に入り、遂に出期なきに至るものなり、此の冥暗を打開して本來の面目を見せしめ、自然的無我の努力を指示するものは禪の眞

髓なり。

道元禪師曰く、教外と云ふは不立文字也、所謂る禪家なり、學ぶべき師もなく、示すべき機もなし、教ふべきものもなし、只自獨覺法なり……一念不生の處は指向ひて、自己の本分を打開す、是れ禪家の大綱なり。

又曰く、見性とは佛性なり、萬法の實相なり、衆生の心性是れなり、此の性は有情非情に渡り、凡夫聖賢に普くして、却て住する所なし、又此の性は色にあらず、有にあらず、無にあらず、住に非ず、明に非ず、無明に非ず、煩惱に非ず、菩提に非ず、全たく實相なし、之を覺るを見性と名づくる也。

又曰く、大悟と云ふは心は本なり不生なり、法は本より無法なり、煩惱本より是れ菩提なり、心として求むべき心もなし、法として尋ぬべき法もなし、煩惱として斷すべき煩惱もなし、本より菩提なるが故に、菩提として證すべきなしと悟るを大悟と名づく。

瑩山禪師曰く、夫れ座禪は直ちに人をして心地を開明し、本分に安住せしむ、是れを本來の面目を露はすと名け、亦本地の風光を現すと名づく、身心俱に脱落して坐臥同じく遠離す、故に不思善不思惡、能く凡量を超越し、迷悟の論量を透過し、生佛の邊際を

離却す。

無門禪師曰く、春有百花秋有月、夏有清風冬有雪、若無閑事掛心頭、便是人間好時節。

盤桂禪師曰く、草よ木よ汝に示す今朝の露。

第四章 衛生的生活

第一節 惑病同源

近時醫藥の道は神巧を奪ふまでに發達せるも、難病は益々多く、衛生豫防の注意は至れるも、罹病者は日に繁く、人壽は歳に蹙まる、之れ實に不思議の現象と云ふべし、蓋し醫藥は發病後の手段なり、又衛生を重んじ、豫防の注意は至れるも、其多くは枝葉に亘り、外形に走りて根本的病源の退治法を辨せざるに依るものならん。

吾人の心身は宇宙と一體にして、病氣なるものあるべき理なし、只此の精神に惶惑する所ありて、依つて身體をも苦しむるものなり、恰かも太陽は本來光明赫々玲瓏たるも、雲霧之を覆へば日光を見る能はざる如く、人間の病氣は此の日光を覆へる雲霧の如きものにして、人間の本質に病あるに非ず、故に先づ其病源たる惑を制止すれば、

自ら無病長壽にして、又流行病等にも容易に犯されざるに至るべきなり、斯の如きは禪流の坐禪に依るを尤も可とす、現時流行の腹式呼吸及び靜坐法の如きは、固より坐禪の一部なるも、其根本たる精神の調御法未だ充分ならざるものあり、到底坐禪のそれに及ぶべくもあらず、坐禪は固より治病の効あり、又發病豫防の効ありて頗る衛生的なるは云ふまでもなき所なるも、坐禪の効は蓋し此等の少分に止まるものに非らず、心身を調節して其平準を得せしめ、壽を全ふし人生をして意義あらしむる心的活力と身的動力とを兼備せしめ、神靈的法爾の活躍を勃起せしむる根底たるものなり。

佛醫經に得病の十因縁を説て曰く、一に久坐して飯はず、之れ運動不足なり、二に食に貸なし、之れ過飲食なり、三に憂愁、四に疲極、五に淫佚、六に曠恚、七に大便を忍ぶ、八に小便を忍ぶ、九に上風を制す、十に下風を制す。

僧祇律に損死の九因を説て曰く、一に饒養にあらざる食と知つて貪り食ふ、二に食を量らず、三に未だ消化せずして更に食ふ、四に強ひて咽下す、五に已に消化して出でんとするを強て制す、六に食病に適せず、七に病に隨つて籌量せず、八に服藥を怠る、九に智慧なくして心を調ふる能はず。

原坦山師の惑病同源論に曰く、惑病の原因といふものは、黏纏渾濁の流動液であつて、頭腦を蔽蓋するものを名づけて無明と云ふ、而して胸腹に集結するものを煩惱と名くる、蓋し惑體は諸病の源であつて、諸病は惑體の結果である、其の原因一であるから病根と名け病源と名くるのちや……今其の身心の集結を除き滯礙なからしむるの法は、禪定の力によるの外はない、禪定の力は堅確剛強でなければ効能はない、其等の結根を除くを解脱と云ふのちや、若し頓に最も剛堅なる禪定の力を得て、無明の根本を拔去し、痕跡を絶するに至つたならば、即ち最勝の覺者と號し、又究竟樂地と名け極樂世界とも名くるのちや。

此の他養生訣及び各禪經には、飲食に關する要心、睡眠に關する注意等記せるもの多く、又精神的迷惑より肉體的疾病の醸發することを縷説せり。

第二節 益壽害壽

白隱禪師曰く、元氣自然に丹田の間に充實して、臍下瓠然たること未だ篠打せざる鞠の如し、若し人養ひ得て斯くの如くなる時は、終日坐して曾て飽かず、終日論じて曾て倦まず、終日書して曾て困せず、終日説いて曾つて屈せず、たとひ日々に萬言を行す

と雖も、終に怠惰の色なく、心量次第に寛大にして氣力常に勇壯なり、苦熱煩暑の夏の日も扇せず汗せず、嚴霜來雪の冬の日も襪せず爐せず、世壽百歳を閱すといへども齒牙將た堅固なり、怠らざれば長壽を得、若し夫れ果してかくの如くならば何れの道か成らざる、何れの戒か保たざる、何れの定か修せざる、何れの徳か充たざらむ、若し又如上の故實に達せず、眞修の秘訣を暗せず、妄りに自分悟解了知を求めて觀理度に過ぎ、思念の節を失する時は、胸膈痞塞し、胸火高ぶり上りて兩脚氷雪の座に浸すが如く、雙耳淡聲の間を行くに齊くして肺金痛み碎け、水分枯渴して終に難治の重症を發して、命根も亦保ち難きに至る、これたゞ眞修の正路を知らざるが故なり、寔に悲むべし。

他人之を謂はゞ稍々疑を挟むべきあらんも、白隠禪師の斯の言は自家の實驗にして寸毫の疑ふべきなく、理窟にも非らず、禪を説きたるにもあらず、禪師始め多觀して遂に病を得、殆んど死せり、恰かも今日の學生の過度勉強の如きものなり、然るに一旦飄然として正式の坐禪を修し、遂に悟徹と共に大健康を得、有名なる長壽者と爲れり、正身端坐して、氣海丹田に力を込め、心身を調整するは、健康なる身體と偉大なる精神を鑄冶する最良の手段にして、長壽も活動も之れに由つて全ふし得べく、盲學妄觀は

病を發し、偏智を増し、遂に壽を害するものなり。

第三節 全壽全死

釋尊成道の曉、仙あり問て曰く、何事を覺りしや、釋尊答て曰く、一切衆生皆依食住と、生あるものは飯を食はざれば死ぬる、飯を食つてゆくことの必要を覺れりと、茲は一見愚弄せしが如き傾あるも、實に千終萬古不磨の大眞理にして、食せざれば死す、死は止なり、萬事休す、生命あつても物種、人身なくては佛法も修道も畢竟空論なり、此の現在身の大切なることは、前にも屢々述べたる如く、道元禪師も亦極力之を訓示せられたり、人事を盡して天命を樂しみ、生を重んじ、死を全ふすべきは、人生の大事なり、然れども又食は絶つべく、道は棄つべからず、法の爲めには死何かあらん、壽を全ふすべきは自然の最上なり、死すべき時に身を抛つは之れ死を全ふするものなり、所謂死然を得たるものなり、這般の兩端決つして錯誤すべからず、故に生は慎まざるべからず、死は恐るべきに非ず、磯までは海女も装着する時雨かな、之れ生を重ずるものなり。

盤桂禪師既に高齡に達し、日々食物の量を量りて、養生を怠らず、僧あり問て曰く、禪師は生死透脱の善智識、猶ほ老後食を量り生を欲するにやと、禪師答て曰く、

吾が身は吾が身にして、吾身にあらず、吾が壽命は即ち諸佛の慧命なり、一切衆生を利益すべき大切の身心、何ぞ之を輕視すべけん、君子一日世に在れば一日世に利あり、一言一行世を利せんとする者は、須らく身の健在を計らざるべからず。

壽を全ふするは禪に若くはなく、又死すべき時に從容死に就き死然を得て死を全ふするも、禪の安心に若くものなし、既に前に述べたる如く、單に坐禪に就て云ふも、第一身體の抵抗力を増し、不時の危難を免かれ、又膽氣他を壓して、能く災害を未然に防ぐべく、更に一方には健康を増長して、能く諸病を壓退し、氣息を調整して肺臟の呼吸遲緩ならしめ、小食粗食にても能く之に堪へ得べく、又活潑簡易の生活に慣れて、病毒の根源を勦絶し、人間本來の天壽を全ふし、死に臨んで苦まず、時間と空間とに制限せられて、合死的の生活は時至りて終局を告ぐるも、死に累せらるゝことなく、又不時の災厄に遇ふて死せざることからざる時は、死して餘光を發すべく、孰れにしても人生の意義を全ふし得べきものなりとす。

第五章 不死の生命

第一節 人格の威力

僧あり趙州和尚に問て曰く、萬法歸一、一歸何處、趙州答曰、我在青州、作一領布衫、重七斤と、此は禪の宇宙觀上に於ける料簡なるが、吾人は更に萬事一に歸す、一何の處にか歸す、曰く萬事是れ人格の力なりと謂はんとす、人格の威力なければ、人類ありと雖も歴史は無きなり、宇宙そのものも意義を有せざるものなり、即ち萬事休す、乞ふ見よ、我が國の歴史中より政治方面に於て神武天皇を始め、垂仁、仁德、天智の各陛下、及び武内宿彌、鎌足等數人を控除せば如何、又更に我史上より神武、日本武尊、神功皇后、田村麿、降て八幡太郎、正成、其他の武將を削り去らば如何、次に宗教界に於て聖德太子、行基、傳教、弘法、法然、親鸞、道元、日蓮等十數人を抹殺し去らば如何、斯くの如く三四の方面より四五、若しくは八九の人物を除き去る時は、日本なる國家存在し得るや如何、堂々たる二千五百年の歴史も全たく空虚と爲りて、現時非立賓、若しくは爪哇と撰ぶ所なきに至るべし、更に世界史上より釋迦、孔子、基督を始めとし、政治界、軍事界より五六の人物を撤去せんか、世界は發見以前の亞米利加と同一の状態に於て、永劫無事泰平なるべきなり。

達磨なくんば慧可斷臂の痛恨事もなく、六祖米を舂くの機もなかるべく、大正の今日數萬の禪僧横行するが如きこともあり得ざるなり、一人格の威力が幾千年の久しきに互りて、幾千萬の人を左右し、幾多の事端を萌發せしむるかは、依つて以て窺ひ得べきなり。

世界の文明と云ひ、社會の進歩と云ふも、皆是れ人格の威力を累計せる總額の多寡に就て云々するものにあらずや、然り而して人格の威力なるものは、獨り善人の威力のみを考計すべきに非ず、善惡の威力相搏つときは、終局善の威力勝利たるべきも、惡人格の威力も亦決つして空滅すべきに非ずして、それ相應の方面に於て、充分の威力を逞ふしつゝあるものなり、左れば文明進歩と云ふとも、獨り善力の蓄積のみにはあらずして、惡力も亦同率を以て累加されつゝあるものなり。

更に一步を超越して國家若しくは道德なる埒外に立ちて大觀せんか、善惡の搏争は其實社會生存上の大要素にして、進歩も此に由つて起り、歴史も道義も此に依つて始めて意義を有するものなり、吾人は固より惡を獎勵する狂者にあらざるも、宇宙の大目的に於ける過程は兩者の並存を容認しつゝあるものなり、道鏡なくんば清麿出

でず、高時尊氏無かりせば正成長年も無かるべし、兩力相争ふて一倒一起、其間自ら進歩あり發展あり、以て人類史上の彩紋は織り成され、織り了りて一段の彩錦と成り果つれば此れ即ち人類の目的を完成せるものにして、宇宙過程の一大段落たるなり。

以上宇宙の大觀なり、吾人は固より善的人格の威力を歓迎し、其活躍を要求するものなり、之れ他なし、善的人格の威力猛熾なるは、人類史の結末を速かならしむるものなるを以てなり、然り而りて此の如き人格の威力は如何にして發見せらるべきか、曰く他なし、禪的修養を第一とす、若し之を疑はば去つて、世間に山積する禪と古英雄との關係を叙せる書冊を一讀せよ。

第二節 努力の餘韻

釋尊は八年苦行して、五十年說法せり、彼は道を求むるに忠實にして、又道の爲めに忠實なり、而して滿幅の努力を竭し、倒れて猶ほ止まざるものなり。

達磨が百餘歳の老軀を掲げて、千里の波濤を渝へ、西來の本懐を全ふし、面壁九年の陰忍は遂に發して五家七宗光彩陸離たる禪風を宣揚し了りしに非ずや。

慧可の斷臂、慧能が長時間春夫に甘せしが如き、彼等の努力至大なりと云ふべし、大

慧が屍に腫物生じて醫死すべしと云ひしかば、死すべくんば猶彌坐禪すべしとて動かざりしが如き、臨濟の六十喝捧に甘んじて多年苦悶せしが如き、黃檗が時の天子に一掌を喰はする底の大識見を有しながら、猶ほ日に七百拜を怠らざるが如き、忠實と熱誠と努力とは、以て懦夫を起たしむべく、我が榮西禪師が南都北嶺四面包圍の裡に在つて奮闘せられし遺勳は如何、道元禪師が宋に在つて病を犯して猶坐禪を怠らず死を以て寧ろ本懐なりとよせし大勇猛大努力は、遂に七百年連綿として一萬餘の禪寺を日東に遺すに至れり。

人は一休禪師を以て天才的の滑稽家の如く信するのみにして、未だ彼が石山寺に七日間斷食參籠して師を求め、其良師を得ざるや死を決せしが如き幼時の忠實熱烈なる努力を知るもの少なし、白隠禪師が隻手の聲は耳にするも、其病軀を驅つて決死修道せしの努力を詳らかにせざるは何故ぞ。

人類史上の一切は人格の力に由りて、全部解決せられたるべきものなり、然り而して其人格の威力なるものは、詮する所努力の餘韻に他ならざるものなり、尸位素餐盜生の白面兒輩以て省るべきなり。

第三節 不死の感化

人類の生理的壽命は百五十歳を最長期として、千餘年間の統計に依れば、其半數即ち七十餘歳を以て平均壽命と爲すと云へり、生物は必死的にして、死は合理的なり、左れば人間は一定の期間活動せる上は、物理學上生理學上の公則として、心身共に衰損するものなれば、必ずや死せざるべからず、前者死すれば第二の活動は之を新しき活動力を有する者、即ち壯者に譲るべきものにして、子孫、資弟と稱するもの即ち之れなり、要するに吾人は宇宙的大目的の爲めに活動すべく生まれ、一定の活動を爲したる後には、合理的必然的に死すべきものなり。

死とは宇宙の眞體より現はれ、其目的の爲めに活動して疲勞せる故、再び本邸に歸休するものなり、例へば此の世界は作業場にして、宇宙の眞體は自家の如きものなり、吾人は死に去りたりとも吾人が爲せし工作そのものは永久に亙り歴々として存在す、即ち吾人の形質及び習性は子孫及び周圍の人衆に傳つて永久に連續し、又吾人の動作せし活力は、悉く社會の慣習、社會の精神と化して、社會を進歩發展せしむる原動力と爲りて人類と共に終りを全ふすべきものなり。

狭き範圍に於て日本人類六千萬の現在を考査せよ、日本の各階級に於ける社會には如何なる習慣を有し、如何なる社會的精神に支配せられ居れるや、又各個人の一舉一動より其心裡を解剖し見よ、何ものが尤も多く其領域を占め居れるか、吾人は斷言す、悉く之れ偉人の餘影にして、努力的人格の印象ならざるはなしと、其偉人なるものには正成あり、秀吉あり、孔子あり、孔明ありと雖も、其尤も普遍的なるは釋迦なり、釋迦なる印象は老若男女を問はず、又反對家たるを問はず、釋迦と其佛敎的思想并に言語習慣は、到らざる所なく、洽ねからざる所なし。

然れども其尤も穩健なる思想界の中堅と稱すべき中流社會の社會的精神は孰れに在るか、之を一見すれば儒敎五分に、我國固有の思想たる神道三分、佛敎二分の如き、觀あるも、審らかに其内容を精査する時は、儒敎のそれは形式方面にして、神道は畢竟儒佛の合成に過ぎざるを以て、神道を分析すれば、遂に儒佛に歸結するに至るべきなり、尤も固有思想の種子は存在すべきも、之を打成せるものは儒佛にして、中流社會即ち思想界の中堅に稱ふるものは儒佛兩者たるは疑もなき事實なり、然り而して其潛勢力の實測は佛敎八分、其八分中禪は七分迄占有し、儒は二分に過ぎざるなり、

蓋し日本人は祖先神の他所謂人格的有神論を信せず、又愚夫愚婦を除く他未來主義に傾かず、左りとして儒敎は餘り窮屈なる點ありて、磊落豪放の邦人に適せず、是を以て禪は思想界中堅の眞髓に喰ひ入りて、或は武士道を醱酵し、或は洒落脱逸の氣風を馴致し、以て現代の所謂大和魂、大和民族性なるもの醇化するに至れるなり。

之を要するに釋迦も生けり、達磨も不死なり、榮西も道元も吾人の左右に嚴在して、日夕吾人と商量しつゝあるなり、彼等は大死一番遂に不死の生命を得たるものなり、無限の活動、不朽の感化を二六時中間斷なく現前せしめつゝあるものなり、二十世紀の文明は複雑にして、現代人士の頭腦は豊富なりと雖も、若し彼等より禪を取り去らば如何、換言すれば日本の思想界より禪なるものを撤回せば如何、興味索然、内容寞落、自信の根底忽ち崩壊し了るべきなり。

第十編 實驗せる禪味

一、如是我觀

世は如何に進歩すと雖も、人生は不如意を免れず、此の世は半面より見れば、如何にしても苦界なり、平和といひ、文明といふ、而かも争鬪敗徳は公々然として遂行せられつゝあるなり、此の土は實に穢土と云ふも誤りなし、主觀的に吾人の腦中に鬱結して、容易に解脱し得ざる不平苦痛妄想、又客觀的に社會の不如意不自在、斯の主客兩境に於ける苦惱を超越して、絶對的の樂天地に逍遙し、自在の生活に入るは宗教の最局目的なることは、今更新しく謂ふまでもなし、然れども此の最高目的地に到達するには、如何なる方法手段に依るべきかと云はゞ、そは勿論種々あるべけれども、結局絶對本尊即ち所謂神佛に歸依信任すると、一定の秩序を踏み力行修養するとの二に過ぎざるべし、甲は即ち信仰論、乙は所謂自修論なり、而して此の自修の一種として、觀法なるものあり、吾人は今茲に佛教觀法の大體を骨子として、此れに自己の實驗を調和して、左に順次之を略叙すべし。

二、數息觀

此は吾人の頭の中にある妄念を拂ひ、無念無想に入らんとするの法にして、腦病、神經痛、心配のある者等は、大に行ふべきものなり、其の方法は先づ成る可く靜なる一室を清掃し、一切の器物を取片付け、眼に障はり、耳を衝く様の物を却け、他の香臭等を防ぐ爲め、良好の香等を焚き、暑からず寒からざるやう注意し、冷水浴等をなして、身體を清潔にし、尻膝の痛まざるやう座蒲團を敷き、半跏として一種のあぐらをかき、兩手を組み、みて下腹の所に當て、下腹に充分力を入れ、半眼にて眼の高さと同一程度の一處に落腫し、總ての態度は體操の氣付の姿勢に則り、斯くて深呼吸を爲し、一より十まで其息を數ふべし、此れ即ち數息觀なる名稱の起る所以なり、呼吸を數ふるは他の妄念を防ぐ爲め、又十までにして一に返るは、十以上は數ふるに困難にして、却て數に執着し、苦しめらるればなり、如斯して三十分間又は一時間若しくは二時間も毎朝又は朝夜二回宛行へば、最初は却つて妄念湧起すれども、三ヶ月、半歲、一年も経れば、心神次第に清爽を覺へ、記憶力、判斷力共に頗る強く、難解の數學等にてても平易に解答を得るに至る。

而して此を三ヶ年も續くれば、線香の灰の落つる音も軒の雨滴の音の如く聞へ、何とも云ふべからざる好き心地になるべし、斯くなれば最早や占めたるものにして、より以上の妙味は實驗して自ら味ふの他なし。

三、治慾觀

慾と云ふにも種々あり、食慾、淫慾、財慾、名譽慾等は、其の最たるものなり、尤も食慾、淫慾等も、生理的本能的に發作する或程度までは咎むべきにあらざれど、時に多くの美味を貪り、又淫慾に惑溺するが如きは、大に警戒を要す、左れば此等の慾念を制治することは、人生の要務たり、殊に青年時代には最も肝要の事なりとす。

先づ美味の食慾を治するには、膏肉之れ糞尿なりと念じ、此に關する書畫等を掛けて之を觀じ、食は體を養ふに足れば可なり、美味必ずしも攝養たらざるの理を想ひ、粗食又は寡食に堪ゆるの意を強くすべし、元來粗食も習慣となれば決して衛生に危害あるものに非ず、美味を重ぬれば胃腸を損すること甚だしく、殊に一家の生活費は美味の爲めに浪費すること最も多し、生活難は大概飲酒と美味とより來るものなり。

淫慾を制して一定の習慣を作ること、人生最大の急務たり、朝に紅顔ありと雖も夕に白骨と爲る、上皮一枚引剥げば均しく之れ糞袋たることを觀じ、美姬の舞姿と相並びて白骨と扇子のみ以前に變らぬ繪等を掛け、淫慾は精氣を耗するの大なるもの、不正過度の愛慾は人生の最大苦惱なることを念す可し。

名利の慾は飽くことなくして、遂に自ら繫縛せらるゝものなり、君子は屋漏に恥ぢず、命臨終の時王位珍寶妻子隨順せず、唯だ戒と施とのみ今生後生の侶伴たるの意を念じ、名利は永く己と人とを誤り、不放逸擅施は永世に功德を存し、不死不朽なることを觀じ、一方に妄想を排斥し、一方に眞實の絶對の勇氣を喚起し來るを肝要とす、是等を消極的とか、意氣地なしと同視すべきにあらず。

四、月輪觀

春月の艶なる、夏月の麗なる、秋月の清なる、冬月の嚴なる、辨れるも月は清淨のものなり、何人も此の月に對しては惡念を支持するの力を有せず、月輪觀は固より詩的なり、宇宙萬有を詩化して、自己の惱裡を清淨に爲すは月輪觀に若くものなし、明窓淨机

の下、或は丘上、或は海邊湖畔に在りて、靜夜月光に對するの時、何人か神化せざらんや殊に曉月、萬象悉く眠りて、宇宙未だ醒めざるの時、曉月と我、天地只此の二象のみ、月我に入り、我れ月に入る、月が我が我が月か、心身全く脱落して乾坤我と俱に鎔く、塵界の俗情最早犯す餘地なし。

五、實相觀

之れ宇宙の眞相如何、人生の歸趣如何と觀するものにして、人一度此の問題に遭遇せば、宜しく靜座して眞摯に其の解決に努めざるべからず、一週間や十日間位は寢食を廢するも可なり、よし夫が最高の解決、究竟の眞理ならずとも、兎に角自分丈の自覺一種の何等かの解決を下さざれば止むべからず、而して獲得せる解案自覺に據りて人生に處し、誤りなきや否やを最も大膽に試験すべし、斯くて夫が彌々大丈夫とならば、そこに始めて主義信仰を成立し、財産も生命も一切萬物は此の主義信仰を中心と爲し、其の犠牲と爲りて活動するに至る、是れ即ち僞なき存在なり、醉生夢死にあらずして、意義ある生活なり、一舉一動悉く天真なり、皮相の觀察や、惑へる社會よりは惡と

見らるゝ事なりとも、矢張大聖の活動たるなり、經世済民的の健闘たるなり、斯くなる時は、最早毀譽を以て動かす能はず、刀鏃を以て威すること能はざるなり。

六、自然觀

江上の風月、靈岳、碧水、之れ自然が吾人に寄贈せる無盡の寶なり、此の寶は金力にても之を私することは不可能なると同時に、如何に貧賤のものとも雖も、遠慮なく悠々と之を弄び、之を楽しみ得るものなり、此の自然の美、無盡の寶を楽しむこと能はざるものは、縦令位人臣を極め、富巨萬を累ぬと雖も、其の寶は甚だ小なく、甚だ憫れなるものたるなり。

金力と權力とは人生非常に貴ぶべきものなれども、多くの場合に於て、人を害し、己を誤るものなり、天然を楽しみ、自然に同化するものは實際的の成佛なり、天然の美は吾人の精神界裡より種々の妄想を洗ひ去り、綽々たる餘裕を與ゆるものなり、過敏なる神經を緩和し、肉體上に大なる休養を與ゆるものなり、金力と權力とはなしと雖も、心は長閑にして、破衣粗食、多少空腹たりとも、身體は豊にして強健なり。

心身の穢と疾患とを除くは自然に同化するより優ぐれたるはなし、威々として權に縛られ、金に括られ、又腐敗せる市街の屋内等に籠居して出づる事を知らざるは實に自然の寶に棄てられ、自ら牢獄に繋がれたる者と謂はざるべからず。

元來宗教上の信仰、或は安心等いふものは、偉人の感化に由りて得らることあり、又深く理性に訴へて自覺し來ることもあり、然れども偉人は常に在らず、哲學的自覺は何人にも望まれず、只最も普遍的にして、併も時と所とを撰ばず、到る所、欲する時に應じて感化を與へ得るものは、天然の美なり。

眼を聞けば、天に日月星辰あり、地に山河あり、耳を聳つれば、鳥の囀るあり、蟲の鳴くあり、春花秋草は足の動く所に従ひ、翠綠皎雪は身の在る所に従ふ、秩然亂れざる一定の大法の下に、而かも變化あり、曲折あり、奪ふて盡さず、樂みて滅せず、最も自由に、最も萬全なるものは、それ自然の美か、人爲の書畫管絃、美は即ち美なりと雖も、自在ならず、雄大ならず、然るに人多くは人爲の美にあくがれて、自然の美を顧みざるは何んぞ蓋し彼等の眼界小に、理想卑くければなり。

全智全能の神、大慈大悲の佛、宇宙の大精神、吾人は其の虚實を確むる能力を有せず、

只吾人の實際に感知し、關係し得るものは天然の他になし、太陽は單に火の球なりとするも、又鶯の鳴くは雌を呼ぶものなりとも、科學的には如何に器械的なりとも、大海原の彼方に旭光の指し登る雄偉の光景、さては夕陽、又月は大空に横はりて千里明らかなる有様に對し、或は鶯の聲を聞きて、吾人は單に器械的に感ずる事能はず、雨は水蒸氣の寒熱に依りて循環するもの、雷電は電氣の作用に過ぎずといへば、それ迄なれど、吾人は迅雷風烈必ず變ずるものにて、自然は如何に器械的なるも、吾人の感ずる所は神祕的なり、吾人は宇宙そのものを一大活物と觀じ、天然そのものを直ちに神視するものなり、太陽は日の神なり、月も星も神なり、風の神、雨の神、大山も江海も自身それ直ちに神なりと考へ得るものなり。

自然神教は之れ實に太古野蠻人民の宗教なり、又小兒の思想なり、併し吾人は赤兒の心に歸れるなり、太古野蠻人民の信仰は事實なり、空想にあらず、理窟にもあらず、吾人は文明教と非文明教とを問はず、自然を神視し、自然に同化することを欲するものなり。

苟くも宗教信念の確立を期するもの、若しくは人生の趣味を解せんとする者は、須

らく自然を楽しめ、野卑なる偏僻なる煩悶を去り、心身の安靜堅實を得んと欲するものは、只將さに自然の感化に由り、自然に同化せよ。

自然に同化する方法如何、朝夕の散歩可なり、一日の郊外遊歩可なり、月に幾回の遠足不可なし、年數回の旅行益だ好し、之等は普通の法なり、若し特別の法にていへば佛教の雲水甚だ宜し、普通旅行にても雲水のならざれば効少なし、金あり同伴者あれば弊あり、金は自然に遠かる媒を爲し、二人以上相寄れば虚飾其間に生ず、人は固より社交的の動物にして、社會組織上には詮方なければ、社交には半以上の虚偽あり、心的修養には伴を要せず。

三界無住方所を定めず、時間の制縛を受けず、俄へて始めて食を求め、樹下石上に眠る、悠なる哉、天地が我が我が、天地か、陶然として自然に同化し、天真玲瓏一點の虚と汚となし、之れ雲水の眞狀なり。

人は空腹の經驗なきものは共に語るに足らず、野宿の經驗なきものは、俱に謀るに足らざるなり。

雲水の實踐之れ實に天然三昧觀なり、斯くて心身共に綽々として餘祐を得、絶對的

樂天に入り、翻つて塵世社會に處す、無我の大我、法爾自爾の大活動は自ら起り、千歳不滅の大業は自ら發起せらるゝものなり、之れ即ち神なり、佛なり。

七、大趣味觀

趣味といふことにも種々あり、旅行の趣味、美術上の趣味、政治的趣味、教育上の趣味、宗教的趣味等算へ來れば際限はなきも、吾人の趣味と云ふは、かゝる斷片的のものに非ず、此等斷片的の趣味は趣味といはんよりは寧ろ嗜好といふべきもの多し、否、世間には所謂趣味なるものと嗜好なるものとは、多くの場合に同一意味に言ひ表され、又風流と云ふことも、嗜好や趣味と相互に代用される場合あり、或る嗜好或る趣味詩的風流いづれも可なり、併し嗜好にても善き嗜好もあれば、悪しき嗜好もあり、又單に遊戲的なるものあり、吾人の今所謂趣味とは、人生の全體を支配する所の趣味なり、吾人の一生を托する所の嗜好なり、自己の生命と同化せる風流なり、一時的のものや、遊戯的のものには非ざるなり。

全體人生なるものは、趣味なかるべからず、即ち人間なるものは趣味ある生活を爲

さるべからず、趣味ある生活を除けば人生といふことも自ら無意義に歸す、何等の趣味を有せずして生活するものは、器械と大差なきにあらずや、よしそが如何に道德的であり、大切の事柄なりとて、趣味を有せずして爲すことならんか、結局一種の虚偽に隨すべきなり、吾人は如何にしても趣味を以て、此の世を過ぎざるべからず、趣味的生活の前には、道德の必要もなく、宗教の必要もなし、否、宗教道德の要否は全く問題たらざるものなり。

嗜好と趣味と一致し、更にそが吾人のたどるべき終生の職業とならば、即ち天職なり、吾人の性格に適し、大なる嗜好を以て迎へられ、趣味を以て従ふべき、一生不變の職業。此の職業即ち天職なり、此の天職に盡すは趣味ある生活なり、左ればよし其の職業が社會組織上には價値なしとするも、若しくは猶進みて社會組織上に有害なりとするも、夫は社會組織の不完全より來る結果に過ぎずして、之に由りて趣味的生活そのもの、天職そのもの、價は決して左右せらるべきものにあらず、老子は大道廢れて仁義ありと謂へるが、吾人は斷言す、仁義道德の強制壓迫は人類をして、多く虚偽に陥らしめ、人生の趣味、否、意義を全然没却し去るものなりと、斯く言へば、夫は人道の破

壞なり、本能主義なりとて心配するものあらんが、如何にも夫に間違なきなり、仁義道德等にて箝縛せられたるけちくさき人道を打破せざれば、人生の眞意は現はれざるなり、世界十六億の人間は、道德てふ名義の爲めに、悉く己を欺き居るにあらざるか、全然虚偽の動物となり居るにあらざるか、翻て本能主義てふことは決して恐るゝものにあらず、道德的に所謂悪なるものゝみが本能にあらず、慈悲同情孝悌てふが如き、犠牲的精神てふが如きも亦本能中に嚴存せり、此の偉大、玄妙、自在なる本能を充分に發揮せしむることをば勉めずして、人爲的の窮屈なる道義てふ轡を以て束縛し、束縛の結果、益々人生をして偏僻陋少ならしむるは何故なるか、之れ吾人の甚だ解釋に苦しむ所なり、神髓、法爾、自然之れにて充分なり、善とか悪とか、かゝる分別は餘計の事なり、悪平等にても構はず、否、悪平等にて充分なり、悪平等の爲めに、かゝるけちなる社會組織が破壊されんか、猶更結構なり、吾人は善悪以上に道德以上に、神聖なる、虚偽なき自然的本能的社會を要求するものなり、自己の爲し得ざる事柄を道德の名に依りて人に教へ、人に強ひんとするは何たる滑稽ぞ、今日の教育及布教なるものは畢竟滑稽なる一種の悪戯に過ぎざるものなり。

吾人は公言す、窮屈なる道德的批判の上に於て、善なりとも、悪なりとも、それに心を勞するの必要はなし、善といふとも高の知れたるものなり、悪といふも驚くに當らず均しく皮の上の細工に過ぎざるなり、只何にてもよし、各自に趣味を持てる事をば充分に勵行すべきなり、趣味ある生活、人造の世間を打破せる自然の社會、神も佛もこれ以上のものにはあらざらん、若し神佛がそれ以上なりとせば、吾人には何等の關係なく、人生の標的なるものにあらず、宗教も、信仰も、趣味的生活以外には何等意味を有せざるなり、併し其所謂趣味生活、そが即ち信仰なり、宗教なり、眞道德なりといはんか、最早議論は盡きたるなり。

人爵如何に貴きも、彼等に趣味なければ、王侯將相皆之れゴム人形と異なるなし、お三さん丁稚等他の壓迫に依り何等の趣味もなく、器械的に、否、全然虚偽に發作し居れるは、之れ牛馬と擇ぶ所なし、鸚鵡返しに喃べりつゝ布教するもの、之れ蓄音器と何等の差あらんや、吾人は味あれば食ひ、興感到れば動く、飽迄自主的なり、自動的ならざるべからず、一毛の虚偽を挟むあれば、人生の真相忽ち茲に没す、若し又吾人の趣味的生活が不完全なる社會組織と衝突して迫害せらるゝことありとせんか、吾人は又唯趣

味ある犠牲たらんのみ否、趣味の爲に斃れて何等の痛悔を感ぜざるなり、吾人をば餓へしむべし、吾人の生理的生命をば奪ひ得べし、併かも吾人が斯の如き亂暴なる社會と奮闘する感興趣味をば如何なる手段を以て奪はんとするか、趣味ある生活は絶對の生活なり、絶對の生活は時間を超越す、故に生理的生命の長短に由りて拘束さるゝことなし、器械的半牛馬的生命の長壽は寧ろ業晒に過ぎず、長期の牢獄に過ぎずと知らずや。

酒好きは酒を澤山呑みて酒と情死すべし、好色家は色を漁りて色に斃れるも面白し、戚々として社會に貢献なりとか、子孫の爲めとか、かゝる事は偽君子のいふべきことなり、自暴自棄も虚偽には勝れり、裸體にて生れ出で、裸にて死に行く、差引損徳はなき筈なり、或は謂ふ他の厄介になるなり、社會の邪魔になるなりと、眩は可笑し、厄介と爲すもの、邪魔とするもの、皆餘計の御苦勞なり、自己の運命の始末すら能くせざる人間同士にて、他人や子孫等の運命まで云々せんとするは、能くくゝの物好なり、然し夫れもよし、かゝる事に趣味を持てる者は、そを一生懸命にやるべきなり、要するに相互に他の干渉を止め、己の欲せる事を着々實行し、遣り損じて死すれば、それにて人生の

一段落なり、歴史とか死後の批評とか、そは他人の疝氣を頭痛に惱む神經家の云ふ事にして、吾人の頭にはかゝる穢はしき餘裕なきなり。

八、奮闘美觀

角力が引分けにならんとする前には、一見極めて平靜にして、力を出し居れるか、又角力つて居れるや否や分らず、否、全く休止し居れるが如し、而かも其實兩者は全力を賭して奮闘しつゝあるなり。

又夫婦の間にて睦ましく極めて平和の家庭といへど、其實は夫は妻の愛の全部を己れに奪はんとし、婦は亦夫の總てを奪はんとして極力奮闘しつゝあるなり、然るに若し此の戦闘力にして、兩者の孰れにても一分の缺陷を生じ、弛みを來たさんか、所謂平和は忽ち亂れ、美なる家庭は破れ始むるものなり。

月は大空に横り、千里明らかに、乾坤眠りて萬籟響きなきの時は、實に靜の極平和の至なり、然るに何ぞ知らん、月と地球との奮闘は、各々其全力を盡して行はれつゝあらんとは、地球と太陽又然り、宇宙の間何ものか然らざるものあらんや、奮闘の最中は外

觀的に平和なり、美なり、休戦は破壊なり、醜なり、人生豈亦然らざらんや。

宇宙の總ての力は吾人の生命に向ひ、あらゆる破壊、あらゆる壓迫を加へつゝあるものなり、吾人は此の破壊力、壓迫力に向ひ、最も猛烈に抵抗し、最も頑強に奮闘する時代は、人間一生の花なり、美なり、然るに其戦闘力、抵抗力が段々弱くなるに従ひ、人間の價値は漸次減少し、最後には全く破壊し盡さるゝなり、即ち生命を奪ひ去られ、死といふ現象、茲に現出さるゝなり、已に一旦は破壊せられ、壓迫せられ、了り、即ち死すと雖も、物理學上の自然原則は、更に反動力を起して第二の生を開始し、壓迫と反動、斯の如く力學の法則は無窮に連続して止む事なし、之れ即ち生死輪廻なり、壓迫し盡されたる所は、反動の起る所、即ち死は第二の生と同時同所なり、第一の死即ち第二の生なり、生死輪廻は畢竟物理學上の力學の法則そのものに過ぎず、哲學や宗教の説明を借るまでもなきものなり、又科學が決して宗教を破壊するものにあらず、未來生活決して無きにしもあらず、確に科學の證明する所たり、科學者が未來を否定し、宗教家が科學を忌むは共に己を知らざる近眼者流なり。

次に又力學の法則として壓迫に對する抵抗力の強き程反動の大なるものなるこ

とは云ふ迄もなきことなれば、人は現在に奮闘し、宇宙の壓迫力に向つて頑強に抵抗せる程、第二の生活、即ち未來生活は大なるものなり、大なれば大なるだけ、それだけ、吾人の生命生活は擴大せらるるなり、天國生活といひ、淨土往生といふ、畢竟第二の生活の擴大を意味するに過ぎず、かゝる意義に於て佛教の所謂三世常住、三世因果等は、眞に適確の大眞理たり、然るに若し夫れ天國淨土なるものが單に靜止のものたるならば、吾人は如何なる美なる生活と雖も、決して望む所に非ず、たとへば百味の御食にて蓮の花の上に止まり居るとても、別に難有譯にあらず、實は退屈千萬なるなり。

第二の生活の擴大、之れ所謂未來の淨土、天國なることを忘るべからず、而して第二生活の擴大は現在に於ける頑強の抵抗奮闘に在ることを知らざるべからず、吾人が努力主義の基礎全く茲に在り、世の徒らに空論大言壯語して美なる文字に由りて陳列せられたる大主義を主張せらるゝものは、宜敷一考する所あるべし、努力奮闘これを除外しては、人生は全然無意義なりと知るべし。

吾人は奮闘努力して死す、之れ即ち第二の生活に向ひ、関喊を上げて凱旋すものなり、然るに世の薄志弱行にして、自殺等爲す者は、捕虜となりおめ／＼送還さるるも

のなり、藤村操が少年哲學者なりとするも、詩的死を遂げたりとするも、彼は現在に於ける壓迫に對する戰鬥力を喪失せる一捕虜なり、未來第二の生活に於ては送還されたる捕虜なり、敗軍の兵なり、輕侮と羞辱とに由りて未來生活を開始しつつあるなり、左れば吾人は心力に於ても、體力に於ても、全力を盡して奮闘を試みざるべからず、而して出來得る限り健康に、出來得る限り長壽に、出來得る限り物質的豊富を求めざるべからず、徒らに精神的々々と云ふは片輪的なり、完全ならず、力學の原則は習慣性に由り、現在に於て物質的に豊富強壯なるものは、未來第二の生活に於ても矢張同一の結果を表し得ればなり、精神的には固より論ずる迄もなき事なり、故に吾人は奮闘に奮闘を積み、擴大に擴大を重ねて、宇宙の凡ての破壊力と相對する互角の勢を爲す程度まで進まざるべからず、茲れ即ち不死の境界なり、再生せざる場合なり、否、生死を離れたる平和の極、美の極、其實最大奮闘の極致なり、人生の凡ては物理學の一原則に由り明白に解釋され盡すものなり、生死輪廻も、三世因果も、天國淨土も皆此の原則以外のものにあらず、然るに徒らに高遠なる架空の議論を振廻し、荒唐無稽の妄談を恣まゝにして得たりとするものは亦甚だ憐むべきの至りならずや。

吾人は能く食ひ、且つ充分に運動し、而して何でも自己の趣味を有する職業に向つて全力を盡して努力すべきなり、斯くて壽命盡れば凱歌を奏して第二の生活に向つて進撃せんのみ、而して第二の生活に於て金鷄勳章を胸にして戦勝の勇者として歡迎さるべきなり、松吹く風の音も、溪川の水の音も、皆閑の聲なり、調和の音にも平和の聲にもあらず、宇宙は全部戰場なり、而して戦機は次第に熟しつつあり、否、現在の刹那は正に之れ叫喊時代なり、又二十歳以上三十四五十までは個人としての叫喊時代なり、いざや早く叫喊すべし、地勢、兵器糧食、かゝる事を考ふる餘裕はなきなり、敵の劍槍は已に汝の劍戟と相接せり、最早一秒時の猶豫も不可能なり、いざ早く叫喊せん、然らざれば忽ち捕虜となるべし。

捕虜と爲りて第二の生活に入るは肩身狭し、或は軍法會議に附せられ、土鼠となりて土中生活をなさざるべからざるやも計られざるなり。

九、飲食大觀

一日爲さざれば一日食はず、之れ傑僧百丈懷海禪師の警句なり、極めて平凡の如く

にして、大に深遠、深遠の如くにして別に大したる事なし、爲さずして食はんとするは人情の最も趨り易き所なり、この人情の弱點を叩き潰して働かざれば食はずと云ふは、實に偉大なり、然し朝鮮人等は雨降りとか風の目とかには、如何にしても働かず、働かざる故に食ふ物なし、従つて食はざるなり、爲さざれば食はずと形式は、百丈も韓民も同一なるも、無なるが故に食はずと言ふ詮方なしの諦め主義と、有無に係らず爲さざれば食はずといふ強情とは少し相違あるなり。

爲さざれば食はず、之れには人生の上に於ける絶對の眞理を含めり、即ち人間は食はんが爲めに働くにあらず、働く爲めに食ふの必要あり、働かざれば食ふ必要なし、否生存する必要なものなり、實に吾人が努力主義の妙諦と同一に歸するものなり。

食ふを主として働くを副とせば、職業は何にてもよし、乞食をなすも、泥棒をなすも、儲けて甘く食ひさへすればよき譯なり、清貧に甘んじて天職を樂む等と云ふことは全く無意味のものと爲り終るべし。

然るに若し働くを主なりとして食ふは副なりとすれば、吾人は天職を自覺し、職業に興味を有し、貧富吾れに於て何かあらん底の徹達なかるべからず。

禽獸と人間と、即ち獸格と人格との差異は何れの點に在りやと云ふに、全く此の働が主か、食ふが主かと云ふ、生存の標準相反するに依るにはあらざるか、食はんが爲めになすは獸格獸的の標準なり、働くが故に食はざるべからずとは人的生存の標準なり。

食はんとするは生物本能中の本能なり、然るに此の本能を本能の爲めに働かすは牛馬式なり、本能を本能以上の理想の爲めに活用するは人間式なり、本能には榮枯消長あり、酔醒冷熱ありて、永遠常住のものにあらず、従つて悲喜相伴ふものにして、歡憂忽ち轉變するものなり、泡沫の如く幻夢の如きものなり、理想は永遠に樂しみて盡くることなきものなり、理想、天職これが爲めに本能を活用せざるべからず、本能を本能の爲めに剥き出しに逞ふせんとする彼の自然主義の如きは全く獸格なり、牛馬式なり、活用と害用とは似て非なるものなり、本能を盲目的に達せんとするは自然主義なり、之に工夫を加へて自覺的に發展せんとするは人間の本分なり、人生生存の標的なりとす。

本能を盲目的に發せんとするは獸格なり、本能を自覺的に達せんとするは人格なり

り、生物的本能を忘却し了りたる所は靈格なり、神格なり、佛格なり、吾人は靈化に入る能はざるも獸格に墮すべきにあらず。

食はんが爲めに働くは、其の働きたるや全く他律的なり、器械的なり、何等の趣味も其の裡に發見すること能はず、結局醉生夢死の生活に終るべし、働くは人生の本分なることを自覺して働くものは、其の働きたるや自律的なり、自主的なり、能動的なり、従つて、其間に津々たる趣味を發見し、楽しみて禁ずる能はざるものあり、遂には楽しみて食を忘るてふ境界にすら闖入し得るに至るものなり。

一日爲さざれば一日食はず、之れ何たる痛快の語ぞ、爲さざる者は、如何にしても食ふの權利なきものなり、爲さずして食ふ、之れ眞に盜生の甚だしきものなり。

爲さざるが故に食はずとするも、猶婆娑の場塞きたる罪は免れず、然るを泥んや爲すして食ふ、これ盜生にあらずして何ぞや。

轉じて更に吾人の實驗を述べしめよ、予は努力主義を主張し來りしより以來、職用なきの時は運動力持等を爲して之れを償ふ、而かも遂に全く何事も爲さざるの時は先づ晝飯を抜きにし、晚餐を菜食にす、而して其の結果は獨り生理上に經濟上に有利なり。

なるのみならず、自然正義の念を喚發せしめ、大々の活動の動機と爲ること少なからざるものなり。

遊びて甘きものを食はんとするは人情の常にして、萬人共に冀ふ所なり、然るに人は活動せざれば美味も決して甘からざるは何人も否認し得ざるの所たり、翻つて又努力の後には縦令粗食にても大牢の味あるは吾人の常の實驗によりて疑ひなき所なり。

美食甘からざるあり、粗食味よきあり、これを以つて見れば食物は隨順性のものにして働の如何に由りて始めて價を生ずるものなること明らかなり、本能の發作も亦之と均しく、道義と相伴ふて始めて其價値を表し、道義に逆へば更に其價あることなきものなり。

要するに爲さざれば食はず、爲すが故に始めて食ふの必要あると共に食に價を生ずるてふことは、宇宙の大事實にして、何ものも否認し能はざる所なり、如何に詭辨を以つて瞞過せんとするも、事實の前には敵なし、吾人努力主義者は寤寐も此の事實と矛盾するが如きことあるべからず、爲さざれば食はざるをよしとす、飢へて死するも

可なり、爲してこそこゝに食ふの必要あり、又始めての生の價值を生ずるものなり、宇宙の實相、人生の歸趨、この他に又何をか求めんや。

如上の見地に住するものは、人之れに惡を強ゆるも、結局惡作に當らず、發して必ず節に中り、爲すべくして爲すもの、即ち佛作なり、佛業なり、斯くの如くにして、人生の能事了る、以上又何をか求めんや。

禪宗哲學終

禪宗哲學に題す

禿山居士小野清秀氏は先きに佛教哲學を著はして、八千餘卷の經論、十萬餘冊の佛書を整理組織して、全佛教に通ずる教科書たらしめ、又眞言哲學を公にして、幾千年秘密の朦雲に包まれし、密教の門戸を放開し、更に神道哲學を出して、不文の神道界に整然たる一大教典を與へ、其他大小二十八部の述作を續刊し、今又禪宗哲學を發刊せんとす、元來禪書は充棟の多きに及ぶも、不立文字の立場より自然の結果として、悉く斷片的謎題的ならざるはなし、禪の一義は固より筆舌の及ぶ所に非ず、然れども四圍の光景を映寫して、其内容を憧憬せしむるは難からざると同時に、又極めて肝要なり、本書は各方面より禪の牙城に肉薄して、其眞面目を暴露し、秩然たる組織と爲し、首尾一貫以て禪の全豹を窺ふに足らしめたり、氏が組織的手腕の絶大なると、識見卓抜にして筆鋒の犀利なるとは、天下既に定評あり、斯くの如くんば文字も亦ただ必要なり、本書は之を絶後と謂はんは、聊か僭越なるべきも、空前の好著たるは何人も首肯する所ならん、氏は猶日宗哲學、眞宗哲學、其他數著を上梓すべく準備中なりと云ふ、噫、落花紛

々、雪紛々、教權の大老斃れて、教界維新の曙光既に至る、又何等の痛快事ぞ、聊か所感を
舒して書後に跋す。

大正六年猛春

四打庵主 拜識

大正六年五月廿日印刷
大正六年六月一日發行

(禪宗哲學)
定價金壹圓貳拾錢

著作權
所有

著者

小野 清自秀

發行者

東京市京橋區南橫町十八番地
大倉 廣三郎

印刷者

東京市小石川區久堅町一〇八番地
荻原 勝次郎

印刷所

東京市小石川區久堅町一〇八番地
博文館印刷所

發行所

東京市京橋區南橫町十八番地
廣文書店

電話東京四六八三
振替東京二四六三

出版圖書目錄

東宮御學問所
御用掛 杉浦重剛先生著

日本の精神

洞水渡邊約山老師著

強膽術

禪學
應用

哲學博士 元田作之進先生著

日本人心の解剖

內藤鳴雪先生著

俳句のちか道

洋裝美本函入
全壹冊三百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

洋裝頗美本
四六判全壹冊
定價金九拾五錢
送料金八錢

洋裝極美
三五判全壹冊
定價金八拾錢
送料金八錢

洋裝頗美本
菊半截四百餘頁
定價金八拾錢
送料金八錢

出版圖書目錄

法學博士 松崎藏之助先生著

世道と經濟

法學博士 神戸正雄先生著

社會主義及社會的運動

法學博士 花井卓藏先生著

人生と犯罪

爭鹿記

クローヌ綴函入
菊判三百五十頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

クローヌ綴函入
美本菊判全一冊
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

クローヌ綴菊判
頗美本四百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

洋裝頗美本
菊判全壹冊
定價金九拾錢
送料金八錢

出版圖書目錄

法學博士 大場茂馬先生著
人權伸張論

クロース綴函入
美本 判全一冊
三 百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

興業銀行總裁 小野英二郎君校訂
最新 **銀行實務**

クロース綴菊判
四 百餘頁
定價金壹圓五拾錢
送料金八錢

農工銀行支配人 中山佐市君著
銀行解說

クロース綴美本
菊判 四百頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

法學士 難波誠四郎先生著
債權者の權利と損害豫防策

洋裝 美本
五百餘頁
定價金九拾錢
送料金八錢

出版圖書目錄

小野 清秀先生著
神道哲學

クロース綴函入
菊判 頗美本
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

文學博士 加藤玄智先生校閱
文學士 岡島誘先生著
宗教心理講話

クロース綴函入
菊判 四百餘頁
定價金壹圓參拾錢
送料金八錢

文學士 田中廣吉先生著
信仰を基こせる **道德的陶冶の研究**

クロース綴函入
頗美本 菊判
定價金壹圓四拾錢
送料金八錢

文學博士 松本文三郎先生著
佛典結集

クロース綴函入
美本 菊判全一冊
三百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

出版圖書目錄

舟橋水哉先生著
小乘佛教史論

クロース綴函入
美本判全一冊
三金百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

海老名彈正先生著
山上の説教

クロース綴函入
美本判全一冊
三金百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

梅澤清一先生著
西行法師

クロース綴函入
美本判全一冊
三金百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金拾貳錢

小野清秀先生著
佛教哲學

クロース綴函入
美本判全一冊
三金百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

324
528

11.9.4

終

